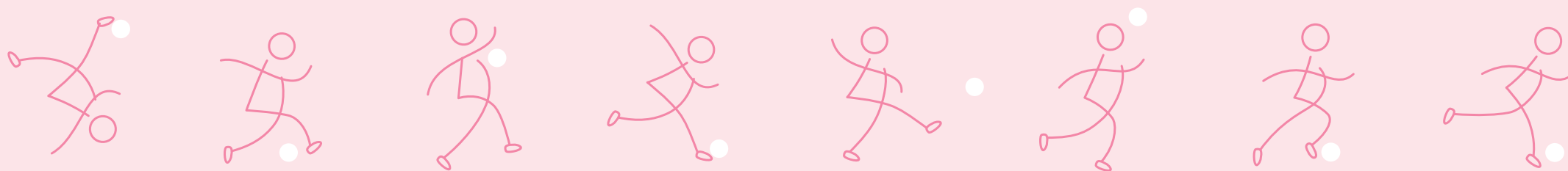


# PASS TO THE FUTURE

HOKKAIDO FOOTBALL ASSOCIATION

vol.2



[北海道のフットボールを支える女性たち]







皆さんの未来につながりますように





## はじめに

2020年度から影響が続いた新型コロナウイルス感染症も2023年5月より5類に移行し、通常の形でのサッカー大会運営が戻りつつあります。

コロナ禍で大変なことも多々ありましたが、「そんなときでも私達ができることが何かないか」と考えました。その一つで(公財)北海道サッカー協会(以下HKFA)女子委員会で取り組んだことが、JFA女子サッカー事業として『PASS TO THE FUTURE ～北海道のフットボールを支える女性たち～』という冊子の発行でした。JFAが発行した『サッカー × キャリア × 未来～ Your Life with Football』を参考に、北海道で女子サッカーに関わっている女性について知っていただき、生涯に渡ってサッカーに関わるきっかけになればと思い作成しました。第1弾では北海道の女子サッカーに関わる21名の女性にご自身の経験を語っていただきました。

冊子は北海道内の女子サッカー関係者にとどまらず47FAにも届けられ、反響が大きく、報道機関に取り上げていただくこともありました。

第1弾発刊から3年が経過しましたが、第1弾発刊後に活躍されている女性を紹介したく、第2弾の発刊の運びとなりました。またHKFA女子委員会での事業紹介の機会として、男女問わず北海道の女子サッカーを支えてくださっている方々から事業紹介をしていただいております。

本冊子は、女子サッカーで選手として活動されている方については「選手以外のサッカーの関わり方」について知る機会、スタッフとして関わっている方は仲間を知る機会となると思います。以前女子サッカーに関わっていた方については懐かしく、まだ女子サッカーに深く触れていない方には新鮮な思いと女子サッカーへの興味が芽生えるものになれば幸いです。『PASS TO THE FUTURE』第2弾が第1弾に続いて、女子サッカーに関わるの皆さんの将来に向けたPASSとなり、さらにその先にもつながっていくことを願っています。

末筆ではございますが、本冊子作成にあたりご協力をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

PASS TO THE FUTURE

公益財団法人 北海道サッカー協会  
理事・女子委員長

中川 綾子

## [INDEX]

はじめに 2

中川 綾子

INDEX 3

17人のPROFILE

MESSAGE

01 石崎 民枝 5

02 松倉 美加 6

03 黒澤 幸子 7

04 蝦名 宏美 8

05 大村 美詞 9

06 阿部 恵理子 10

07 阿部 美季 10

08 赤間 奈津美 15

09 鈴木 まなみ 16

10 五十嵐 優 17

11 佐藤 美幸 19

12 伊東 美智子 20

13 渡邊 真結子 21

14 廣中 千映 22

15 布川 久美 23

16 黒瀬 育美 24

17 梶野 滋子 25

PASS TO THE FUTURE

鷺津 裕美 32

大岩 真由美 32

事業紹介

審判員の役割 11

道新旗北海道女子サッカーリーグ 11

北海道レディースエイトリーグ 12

全道O-30女子サッカー大会 12

道新カップ北海道女子8人制サッカー大会 13

大学 13

U-18 (高校生) 年代 14

U-15 (中学生) 年代 14

女子ユースダイレクターの役割 18

国体サッカー競技少年女子 北海道選抜 18

フットサルの取り組み 26

各ブロックの取り組み 27

北海道U-13女子8人制サッカーフェスティバル 29

U-12 (小学生) 年代 30

キッズ 30

JFA女子サッカーデー 31

本誌は、17名の「北海道のフットボールを支える女性」に焦点をあてるとともに、「女子サッカー」に関する事業をご紹介します。ご紹介する女性の取り組みに関連する事業紹介ページを近くすることで、より女性たちの活動の場への理解を深めていただければと考えております。

## 17人のPROFILE

TAMIE ISHIZAKI

01

### 石崎 民枝

[札幌市出身]

(一社)札幌地区サッカー協会 副会長・同事務局勤務/  
(特非)札幌フットサル連盟 会長/  
札幌地区少年サッカー連盟 顧問

[支えてくれているひと]

未経験者の私をここまで導いてくれた全ての人達。今も周りでサポートしてくれる仲間たち。そして、好き勝手させてくれる家族にえられて今があります。

MIKI ABE

07

### 阿部 美季

[函館市出身]

サッカー 2級審判員 / フットサル2級審判員

[目標にしているひと]

今一番目標にしているのは、一緒に活動させて頂いている稲葉里美さんです。頼ってばかりですが、稲葉さんのような審判員になりたいと思っています。

MAYUKO WATANABE

13

### 渡邊 真結子

[札幌市出身]

ノルディーア北海道 マネージャー

[支えてくれているひと]

直接的にはGMの三浦さんや監督の米山さんに支えられていますが、選手にも支えてもらっています。一緒に頑張りたいと思える仲間です。

MIKA MATSUKURA

02

### 松倉 美加

[美唄市出身]

千歳地区サッカー協会 副会長 /  
千歳サッカー協会 会長 / 千歳地区フットサル連盟 会長  
千歳市議会議員 / 司会者

[影響を受けたひと]

多くの人から影響を受けてきました。人それぞれの良い面に接するたび、尊敬の気持ちを抱きます。

NATSUMI AKAMA

08

### 赤間 奈津美

[音更町出身]

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会  
女子ユースダイレクター 道東担当 /  
(一社)十勝地区サッカー協会 女子委員長・フットサル委員  
・キッズ委員 / (一社)北海道フットサル連盟 女子委員 /  
NOSAI北海道 十勝統括センター 十勝中部支所 業務課

[憧れているひと]

自分にはコミュニケーション能力が足りないと感じています。栗山英樹さんのコミュニケーション能力には憧れます。

CHIE HIRONAKA

14

### 廣中 千映

[牡警町出身]

(一社)コンサドーレ北海道スポーツクラブ  
コンサドーレサッカースクールマスター

[後押ししてくれているひと]

家族の支えがあったから今の私があります。朝早くから夜遅くまで送迎をしてくれたり、遠い場所でも応援に来てくれました。道外でサッカーを続ける後押しをしてくれました。





SACHIKO KUROSAWA

03

## 黒澤 幸子

[苫小牧市出身]

苫小牧地区サッカー協会 副会長

[感謝しているひと]

今私が協会でいろいろなお仕事をさせていた  
だけるのは、大泉さんと石塚さんに出会うこと  
ができたからです。お二人には、本当に感謝し  
ております。

HIROMI EBINA

04

## 蝦名 宏美

[沙流郡出身]

(一社)札幌地区サッカー協会 女子委員長/  
HABATAKE 代表

[支えてくれているひと]

家族が支えになっています。娘たちが小さ  
かった時も日曜日にサッカーに行かせてくれ  
て、その間は娘たちを子守してくれました。

MIKOTO OMURA

05

## 大村 美詞

[岩見沢市出身]

サッカー女子1級審判員/  
空知地区サッカー協会審判委員会女子部/  
北海道教育大学岩見沢校サッカー部  
マネージャー・女子サッカー部

[見守ってくれるひと]

家族は、高校1年生の時に審判を始めたいと  
言ってから今まで、私のやりたいという気持  
ちを一切否定せずに見守ってくれました。自  
慢の娘になれるように頑張りたいです。

ERIKO ABE

06

## 阿部 恵理子

[幌延町出身]

(一社)札幌地区サッカー協会 審判委員会・女子委員会委員  
NPO法人札幌フットサル連盟 専門員/  
サッカー2級審判員・2級インストラクター/  
フットサル2級審判員・3級インストラクター

[憧れているひと]

全道フットサル選手権アルーサ優勝時の水上  
玄太選手に感動したのを覚えています。その  
ときに担当されていた和田安弘審判員にも憧  
れています。

MANAMI SUZUKI

09

## 鈴木 まなみ

[小樽市出身]

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会  
女子ユースダイレクター道央ブロック担当/  
小樽Corsa'rio GKコーチ・事務局/  
小樽地区サッカー協会 女子委員会 普及委員

[リスペクトしているひと]

同じ女子ユースダイレクターの各ブロックの  
4名の皆様には、分からないことを親切に教  
えていただき感謝しています。指導者として  
リスペクトしています。

YU IGARASHI

10

## 五十嵐 優

[恵庭市出身]

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会  
女子ユースダイレクター道北担当/  
中富良野町立中富良野中学校サッカー部・  
旭川女子アチーブ コーチ

[私の理想]

緑が丘中学校の監督の田中拓也先生は学校  
の仕事、部活動の運営、ユースダイレクター  
の仕事、子育てと、何に対しても真摯に向き  
合っていて、私にとって私の理想です。

MIYUKI SATO

11

## 佐藤 美幸

[浦河町出身]

(公財)北海道サッカー協会 女子委員

[応援してくれるひと]

夫(元美香保FC)は現役時代から指導者やサ  
ロンフットボールの普及、大会運営に携わり、  
常にサッカー中心の生活であり、息子とともに  
私の活動を応援してくれています。

MICHIKO ITO

12

## 伊東 美智子

[札幌市出身]

北海道シニアサッカー連盟 副理事長・事務局

[リスペクトしているひと]

支えになっているのは身近にいる主人の存  
在でしょうか。継続の原動力は皆さんとの関  
わりが気持ちをリフレッシュさせてくれます  
し、気持ちを若々しくさせて貰っています。

KUMI NUNOKAWA

15

## 布川 久実

[札幌市出身]

クラブフィールズ・リンダ コーチ/  
新札幌整形外科病院 手術室看護助手

[リスペクトしているひと・支えてくれているひと]

今まで指導して下さった監督・コーチたちを  
リスペクトしています。現在ある自分の元にな  
っています。そして、両親、サッカー・フッ  
トサル仲間、友人、選手が支えになっています。

IKUMI KUROSE

16

## 黒瀬 育美

[岩見沢市出身]

北照高等学校女子サッカー部 顧問

[支えてくれているひと]

チームが私の支えです。監督、コーチ、卒業  
生や保護者も含め、一緒に戦い、イベントは  
全力で楽しみ、私も仲間に入れて支え合っ  
てくれた選手のおかげで続けることができました。

SHIGEKO KAJINO

17

## 梶野 滋子

[札幌市出身]

(一社)北海道フットサル連盟 常務理事・女子委員会委員/  
北海道Corrida・de・Toros.L選手/  
セントラルフィットネスクラブ24東苗穂勤務

[支えてくれているひと]

やはり、夫です。フットサルの仕事は夫の協  
力なしでは続けることは出来なかったかもし  
れません。たまに、悩んでたら手伝おうか?  
なんて、言ってくれます。感謝です。



TAMIE ISHIZAKI

## 石崎 民枝

(一社)札幌地区サッカー協会 副会長  
 同事務局勤務  
 (特非)札幌フットサル連盟 会長  
 札幌地区少年サッカー連盟 顧問

息子さんの少年団入団をきっかけにサッカーの世界に飛び込んだ石崎民枝さん。

選手を第一に考え、つながりを大切に作る誠実なお人柄で、  
 札幌地区のフットボールファミリーを温かく見守っています。



#### 4種年代との関りが、 世界をどんどんひろげていく

中学入学直後、オーバーヘッドキックというものを目の当たりにする機会があり、それが私とサッカーのファーストコンタクト。衝撃を受けただけで、自分自身が競技をすることはないままでしたが、時がたって息子が入団したサッカー少年団の父母会代表になったことがきっかけで三角山 TRES サッカースポーツ少年団の立ち上げ時の監督となりました。チーム監督として必要とされ審判資格も取得しました。少年団結成直後の札幌フットサル大会で BEST4 になったとき、良い選手をたくさん預かっていることを自覚させられ、大切に育てなければと思いました。未経験ながらも選手や保護者の皆さん、指導者仲間に恵まれ、約8年の指導者としての活動中、楽しいチーム運営ができたと思います。

この4種(U-12)年代での取り組みの中で関わることでできた選手、指導者、審判の



方に人脈を広げていただき、いろいろな人と繋がることができ、世界が広がっていききました。その延長として、やがて札幌市サッカースポーツ少年団連盟中央区代表理事となり、事務局長次長となり、さらには、札幌地区協会監事、そして前会長の滑川先生にお声がけをいただき、現職へとつながっていきました。

札幌地区協会は、札幌市、江別市、石狩市、当別町の約13,000名のサッカーファミリーを統括する組織です。北海道15地区協会の一つでありながら、その規模から5ブロックの一つとしての役割を担っています。北海道コンサドーレ札幌、エスポラーダ北海道など北海道を代表するチームも札幌地区協会に所属しており、また、札幌ドームや厚別競技場のある都市だからこそ、Jリーグ運営や国際大会などの注目される大会運営にも力を注がなければなりません。さらに選手数の多さは、膨大な登録作業を伴います。正確さを必要とする業務は、熟練したプロパーの事務局員であっても途方もない作業量であり、2023年度の期中から、私も副会長と兼務し事務局の一員として働き始めました。

#### サッカーを好きなまま 大人になってほしい

もう一つ兼務している役職が、札幌フットサル連盟の会長です。札幌地区少年サッカー連盟のフットサル担当事務局次長になった事がきっかけとなり、前会長の山脇先生にお声がけ頂きお受けしました。会長とはいえ、フットサルというスポーツの裾野を広げるため、

常に前を見て進んでいく素晴らしい仲間たちと一緒に、大会の運営役員として稼働しています。運営役員として関わると、どの種別・性別でも楽しそうにボールを追いかける選手を見ることができるので、もっと良い環境を作らなければという思いになり、やりがいがあります。

札幌フットサル連盟は今、札幌からフットサルを広げるためにいろいろな活動をしています。特に2023年度から始めたフットサルトレセンは、技術委員が前年度の全道U-12地区予選、全日本U-12地区予選の全試合(200試合以上)を視察して選手を選考し活動しています。この年代の女子は体格、運動能力ともに男子を上回る子も多く、性別関係なく選考しております。今のフットサルトレセンからFリーグの選手、審判員、指導者が出ることを夢見ています。北海道は、冬が長く、外でサッカーができる期間は限定されるので、フットサルが競技を続けるためのカギではないかと思っています。とくに、女子選手は、4種から3種になる時の女子の進路先として、気軽にフットサルを選んでもらえるようにしたいと考えています。

私にとって、卒団生たちがサッカーを好きなまま大人になっていることが、サッカー・フットサルに関わってきて一番うれしいできごとです。いろいろな悩みはあると思いますが、自分の好きなことを諦めないでほしいです。諦めるのではなく、一度立ち止まり考える時間にしてください。その時は、一人で考えず周りに相談して欲しいです。結論を出すのは自分自身ですが、色々な意見を聞いてその時最良と思える道を進んでください。間違いに気づいたら、そこからコース変更すればいいだけです。何歳になっても挑戦は出来ます。私が、少しでも皆さんの力になればと思っています。





# MIKA MATSUKURA

## 松倉 美加

千歳地区サッカー協会 副会長・千歳サッカー協会 会長

千歳地区フットサル連盟 会長

千歳市議会議員・司会者

\*千歳地区サッカー協会は  
千歳・恵庭・北広島の  
3つの協会で構成されています。

市議会議員として街づくりにご尽力されている松倉美加さん。  
サッカー経験がないからこそフラットな姿勢でサッカー界を俯瞰し、  
選手たちやスタッフの間近でスポーツの力を感じながら、  
ご自身にできることを探求してくださっています。

コロナ禍の2021年、恵庭市議会議員で千歳地区サッカー協会会長の小橋薫さんから千歳サッカー協会の会長にならないかと誘われたことは、私にとって思ってもみないお誘いでした。サッカーボールを蹴った経験もなく、務まると思えず、最初は丁重にお断りしたことを覚えています。それにもかかわらず、今では各種サッカー大会に足を運び、勝利に喜びを爆発させる選手や悔し涙を流す選手たちの姿に胸を熱くさせられ、スポーツの力を実感し、自分にできることは何かとグラウンドで問いかける日々を過ごしています。



### 好奇心が原動力

美唄市に生まれ育ち、1989年に高校を卒業して、独り立ちの手段として航空自衛隊に入隊。小松基地を中心に3年間活動しました。男女雇用機会均等法が制定されて間もないころに入隊したこともあり、振り返ると女性活躍の frontline に立っていたのだと思いますが、上司や仲間にも助けられ、任務を果たしていくことができました。自衛官としての活動は何もかもがはじめてのことばかりでしたが、持ち前の好奇心で、できることを少しずつ増やして身につけていくこと、関心を持ってやり続けることの大切さも学んでいきました。

92年に北海道に戻り、新千歳空港のインフォメーション業務を行う会社に就職。約7年で退職した後、アナウンサーアカデミーに通い、やがて札幌の司会事務所で実践を積みながら司会を生業にするようになり、3年後独立しました。さらに、司会の仕事をきっかけとして、千歳青年会議所に入会しました。



時代に即した事業の企画・運営を通して、社会起業家として人間力・組織力を学び、マチの魅力の醸成や豊かな社会の創造に寄与したいと活動をしていました。青年会議所を卒業したあとも、青年会議所という枠はなくなりますが、自分で何かやっていきたいと思っていました。

### 市議会議員として、 副会長として、できること

青年会議所の卒業後も、街づくりに関わり続ける選択肢として、市議会議員に立候補しました。少しずつ人やコトの輪を広げ、キャリアを積み重ねてきたとき、千歳サッカー協会の会長のご推薦をいただきました。

一度はお断りしたものの、小橋さんからは、若い方の意見や女性の視点が、サッカー界に必要であり、その両方を持っているよとお誘いをいただき、お受けすることとなりました。2021年にスポーツ庁が示した中央競技団体のガバナンスコードでは女性理事割合40%が掲げられていますが、千歳協会では当たり前のように女性役員を受け入れてくださる素地があり、また、「女性が必要」というよりも、私自身を必要としてくださったように感じ、覚

悟を決めました。

千歳地区サッカー協会は、千歳、恵庭、北広島の3つの地区の競技活動を担う組織です。コンパクトな地区のため、選手を集めやすくトレセン活動が盛んです。また、文教大学附属高校が札幌から恵庭に移転したことで、美しい人工芝グラウンドのある高校サッカーの拠点が生まれたことも近年の大きなトピックです。校長の佐々木淑子さんの魅力もあり、また、道内有数の強豪女子サッカー一部の選手の皆さんの礼儀正しさもあり、すっかりサポーターになってしまいました。

分からないことだらけなので、とにかく大会に足を運ぶこと、現状を知ることから始めました。はじめて接するサッカーの世界は、もちろん感動を伴うものではありませんが、それ以上に、チーム運営も、大会運営も、審判も会計も何もかもを少人数で、業務を重複しながら手弁当で行っていることに驚きました。選手のため、子どもたちのため、という気持ちの強さにサッカー界が支えられていることはすばらしいと思いつつも、少しでも支える方々の環境もよくしたいという思いにかられます。また、中学校の部活動改革の波の中、子どもたちがスポーツから遠ざかることのないよう、そして、先生にとっても、地域クラブの指導者の方にとっても地域の実態にあわせた最善の選択肢をとっていかなければならないと思われました。

グラウンドで、選手やスタッフの皆さまのそばで、肌で感じた思いは、議員として街づくりを担う私の中に根付きつつあります。まだ、サッカー界に何ができるのかは手探りの部分はありますが、この思いを育てながら、副会長としての任を果たしたいと考えています。

# SACHIKO KUROSAWA

## 黒澤 幸子

苫小牧地区サッカー協会 副会長

選手としても活躍しながら、キッズの指導に尽力されてきた黒澤幸子さん。

大会後、施設の隅々まで清掃をしてくださる黒澤さんの姿に、感謝の気持ちを忘れないというリスペクト精神を体現されていると感じます。



### 家族の中心にサッカーがあり、 チームメイトも家族のような存在に

1989年苫小牧にも女子サッカーチームを！というシニアの方々の声掛けで社会人、主婦の仲間が集まり、苫小牧ではじめての女子サッカーチーム若草レディースが誕生しました。学生時代からサッカーを始めていた夫の影響で、チームに参加。チームメイトは家族のような存在で、30年に渡って現役選手として楽しく活動しています。3人の子供たちもそれぞれサッカーを始め、今は孫も一緒にサッカーをしています。みんなで、サッカー談義をしたりサッカーを楽しんだり、黒澤家はサッカーを通して、家族の在り方を考える機会にもなっています。

子どもがサッカー少年団にいたことで、審判にと声をかけていただき、苫小牧ではじめての女性の審判員となり、審判活動も行いました。さらに、若草レディースの監督だった大泉さんから苫小牧地区の女子委員長を任



され、大会運営にも携わることになりました。その後、若草レディースの仲間から多くの女子委員長が誕生しています。

### キッズ巡回指導との出会い

サッカーとの関わりの中で、自分自身の活動に大きな影響を与えたのは、北海道協会主催の巡回指導です。1年間でしたが、YAGENフットボールクラブ代表で苫小牧サッカーの土台をつくりあげてきた石塚東洋雄さんと、元コンソードレの選手が指導者となり、札幌、函館、帯広、釧路など、道内の幼稚園と保育園を回りました。幼児年代からのサッカー普及と体を動かすことの楽しさを経験させ、心身共に健康でたくましく育てて欲しいという願いを込めて、参加させていただきました。

保育士として10年間勤務していた経験にも助けられ、その後、キッズリーダーとキッズテクニカルコーチの資格を取得しキッズの指導にあたりました。ある園に、自閉症の子と一緒に参加していました。人と関わるのを嫌がり、ずっと保育士の傍から離れずにいた子が、終わって帰る時私の傍にきて手をさしのべてきました。抱っこしてあげると、私の胸に顔を埋めしばらくじっとしてからボールを指さしました。ボールをコロコロころがしてあげると、コロコロ返ってきて、満足して部屋に帰っていきました。保育士さんもその様子にびっくりしていました。きっと、一緒に

遊びたくなったんですね。微笑は心を開いてくれる。心の耳で子供の心を読み、全身で子供の気持ちを受けとめてあげることが、私たち大人の役割なんだと思いました。このような経験を経て、苫小牧地区協会内に、キッズ委員会を立ち上げて、巡回指導を苫小牧でも実施できればと提案し、現在は「サッカーしたい子あ〜つまれ！」などの事業を通して、サッカーの楽しさを伝えています。子供は心のままに生き、感動を全身で表現してくれます。どうしてそんな小さな体の中にあんなエネルギーがあるのかと驚きます。子供と接するたびに、新しい発見があり、反省があり意欲が湧いてきます。大切に愛情をもって、子供の可能性を引き出していける大人でありたいと思っています。

### 成長のお手伝いをしていきたい

幼稚園の時に指導した子が高校生になってもサッカーを続けてくれていると、本当にうれしく思います。サッカーを通じてたくさんの仲間と出会い、楽しいことやつらいこともあると思いますが、すべてひとつひとつ必ず自分のこれからにつながり、次のステップへと成長していきます。サッカーができることに感謝の気持ちと、関わっている方々にリスペクトを忘れず、大好きなサッカーを続けていってほしいと願っています。

そのために副会長としてできることを精いっぱいやっていきます。指導者育成や女子の普及、トレセン活動の充実にも力を入れたいと思います。これからもたくさんの人たちが、サッカーに出会える機会や環境をつくり、人とのかかわりの中で、サッカーができる喜びと感謝の気持ちを忘れずに、人としても成長できるお手伝いができればうれしいです。





## HIROMI EBINA

## 蝦名 宏美

(一社)札幌地区サッカー協会 女子委員長  
HABATAKE 代表

サッカーは生涯スポーツと明言する蝦名さん。

ご自身がサッカーを楽しんでいるからこそ、運営にも力が入ります。

若年層の普及とともに、シニアの環境も札幌地区から改善していきたいと積極的に活動されています。



## 剣道からサッカーの世界へ

小中高と剣道一筋、3段の段位を持つ私が、サッカーに出会ったのは、30歳の頃。友人から誘われたことがきっかけです。今でも尊敬する苫小牧協会の黒澤さんには若草レディースで本当にお世話になりました。その後、夫の転勤により札幌に暮らすようになり、それに伴ってHABATAKEに所属することになりました。また、O-40のチームであるラヴァンダでも活動しています。フットサルではサルーテやmmcでも学ばせていただきました。今ではチーム代表を務めているHABATAKEには、若草レディース時代にO-30全道大会で文字通りズタボロに負けたことを未だに忘れたことができません。でも、とてもよい経験になりました。そして、今でも思い出すだけでやる気がわいてくる経験は、ラヴァンダの一員として静岡で戦ったO-40全国大会です。あの記憶が、現役でサッカーを続ける原動力になっています。



選手だけではなく、審判員の資格も取得。大会運営にも積極的に関わるようになり、主に記録を担当させていただきました。苫小牧地区の女子委員長も務めさせていただき、若草レディースの先輩方や石塚東洋雄先生にご助言をいただきながら、大会運営のノウハウを覚えていきました。

## 札幌地区の女子委員長として

長らく札幌地区の女子の活動を支えてくださり、大会運営のプロフェッショナルでいらした米澤先生が女子委員長を退かれるタイミングで、お声をかけていただき2022年度から札幌地区の女子委員長を務めています。札幌地区は、北海道女子リーグが始まる前から地区独自の活動を継続しており、会長杯札幌女子サッカー大会は2024年に第40回目を迎えます。4種からシニアまで約600名の女子選手が札幌地区で活動しています。中学年代の落ち込みが女子選手競技継続の課題でありましたが、札幌地区の指導者の皆様のご尽力のおかげでU-15(中学生)年代のチームが徐々に増えてきています。また、高校チームも数を増やし、そして強くなっていることを目の当たりにします。北海道女子サッカーリーグ連覇中の札幌大学や北海道で初めて全国リーグに参戦したノルディーア北海道も札幌地区に所属しています。長く競技を続ける選手が多いことも札幌地区の特徴です。

北海道シニアサッカー連盟の皆様のご協力のおかげで、道央シニアリーグで女子選手の活動の場を提供していただいています。JFAの競技改革の影響もあり、大人の大会だけではなく、今ではU-15、U-18リーグの全道大会が当たり前になってきています。女子サッカーの世界では、U-15年代以上は、大人の大会にも参加できることから、全道大会だけでチームの活動が過密になってしまいます。そのため、現在、会長杯は4チーム、市リーグは5チームで構成するにとどまっています。一方でシニアの活動できる場を増やすべきだと考えており、今後、シニアのためになる事業を地区で積極的にできないかと考えています。

## 生涯スポーツとしてサッカーを楽しむ

自分自身は、サッカーは生涯スポーツだと考えています。女性は、職業についたり、結婚したり、お母さんになったりと、様々なステージを迎えて、ときにサッカーから離れることもあると思いますが、サッカーをしたいと思ったときにいつでもできることを思い出してほしいと思います。支えてくれる人は、きつといいます。私にとっては家族です。娘が小さかったときも日曜日にサッカーに行かせてくれて、その間は娘たちを子守してくれた家族に感謝しています。シニア連盟の皆さんに後押しされてこの年になって3級審判員を取得したのですが、今、大きくなった長女が、審判員として経験を積んでおり、今では私の先輩です。私は、60歳になったらねりんピックに出場することが目標です。まだまだ成長の途中です。女子全てのカテゴリーでいつでもどこでも楽しくサッカーできる環境になればと思います。若い皆さんには、チームの仲間と一緒に思いっきり動いて、サッカーを楽しんでもらいたいです。

## MIKOTO OMURA

## 大村 美詞

サッカー女子1級審判員  
空知地区サッカー協会審判委員会女子部  
北海道教育大学岩見沢校サッカー部マネージャー・女子サッカー部

2023年、サッカー女子1級審判員に合格された大村美詞さん。  
サッカーを楽しむ気持ちとサッカーを通じて出会った人たちを大切に、  
国際審判員を目指して歩みを進めていらっしゃいます。

## 男子と同じトレーニングメニュー

父が小学校教諭でありサッカー少年団で指導していたので、小さいころからサッカーは身近なスポーツでした。小学1年生のとき、入学後に仲良くなった友達がサッカー少年団に入ったことで興味を持ち、「私もやりたい!」と両親にしつこくお願いしたことを覚えています。日に焼けて真っ黒になっている父を見ている母としては、一人娘である私がサッカーをはじめることには、抵抗があったようです。今となっては笑い話の一つだと思います。母も根負けしたのか、3年の冬、フットサルが



始まる時期から東 FC への入団が叶いました。サッカーへの熱は、中学に入っても冷めることはなく、男子と混じってサンク FC でプレーを続けました。トレーニングのメニューは、当然ながら男子と同じです。今考えても、ありえないほどのメニューをよくこなしていたなと思います。とくに走りのメニューは自分にとっては辛いものでしたが、必死にくらいつこうとしました。自分に嫌気がさしながらも、最後までやり抜いたことは、メンタルが鍛えられたと思いますし、自信にもつながりました。ここで培ったフィジカルは、今の審判活動でも活かしていると感じます。

## 審判員としてサッカーに関わる選択

地元の高校に進学するにあたって、選手としての道をあきらめたのですが、そのようなときに、ユース審判員の活動に誘っていただきました。サンク FC では練習試合で副審を経験したことしかなかったのですが、サッカー



に関わりたいという気持ちは強く、選手以外の選択肢を見つけることができました。北海道には大岩さんや手代木さんといった国際審判員として活動されていらっしゃる方がいらっしゃいますし、道内の大会でも多くの女性審判員の姿を目の当たりにしていたことも大きかったと思います。高校1年生から審判員として上を目指していくことを決めました。

審判員としての活動をはじめ、空知に生まれ育ったことを心からよかったと感じています。ユース審判として活動する中で、空知地区の皆さんのおかげでピッチの中でも外でも様々な経験を積みさせていただきました。私の成長を自分のことのように喜んでいただく本当の家族のような存在です。2級にステップアップし、北海道女子サッカーリーグなどの全道大会でも笛を吹かせていただけるようになってからも、常に寄り添ってくださっています。辛いなと思うと、とことん落ち込んでしまうタイプなのですが、皆さんの支えもあり、すべて自分の成長につながって

いると言いついて聞かせてプラスになるようにしています。この土地に生まれ、皆さんに支えていただくことができれば、活動はつづけていかなかったと思います。

サッカーが好きだという気持ちだけで、様々な形でサッカーに携わっている方々と出会うことができました。サッカーを通じて、沢山の仲間に出会えたことは私にとってかけがえのないものです。選手、審判、指導者、運営スタッフ、応援される方々が、共に試合を作り上げることに素晴らしいことはいないと思います。だからこそ、サッカーに関わる誰もが、周りの方々と環境に感謝し、常にリスペクトの気持ちを忘れずにいて欲しいと思います。そして、北海道に住む全ての人が、サッカーをやりたいと思った時に出来る環境になったら良いなと思っています。私もその一助になれたらと思っています。

## 目標はワールドカップで笛を吹くこと

今年度、女子サッカー1級審判員認定試験に合格しました。空知地区をはじめ、北海道の各種大会で、成長する機会をいただいた皆さまに感謝しています。これからは、WEリーグにも活動の場を広げることができそうですが、これからも多くの経験を積み、国際審判員を目指します。ワールドカップで笛を吹くことを目標にしています。どんなことがあっても、自分の軸がぶれることのないように成長していきたいです。そして常に楽しむことを忘れずに審判活動を続けていきたいと思っています。

高校1年生のとき、審判員を目指すことを伝えてからずっと、両親は、私の気持ちを一切否定せずに見守ってくれました。これからより広く活動して自慢の娘になれるよう頑張りたいと思っています。



# ERIKO ABE & MIKI ABE

## 阿部 恵理子

(一社)札幌地区サッカー協会 審判委員会・女子委員会 委員

NPO法人札幌フットサル連盟 専門員

サッカー2級審判員・2級インストラクター、フットサル2級審判員・3級インストラクター

## 阿部 美季

サッカー2級審判員、フットサル2級審判員

北海道の各種大会に阿部さん親子の存在は欠くことができません。

真摯で、かつ前向きな審判活動が、  
道内の女子サッカー・フットサルを支えています。

### 娘の存在が支えに

(恵理子さん) 私自身は中学まで剣道、高校では弓道をやっていましたが、長男が小学4年生でサッカー少年団に所属したことでサッカーと出会い、選手未経験の状態から審判活動を開始しました。とにかく時間があればサッカーやフットサルの試合映像をみて勉強しました。勉強の一環として週末に様々なカテゴリーの試合を見学し、審判の動きを学ばせて頂いたところから声をかけて頂き、現在



は、札幌地区協会審判委員会、札幌フットサル連盟に所属しています。

看護師として整形外科に勤務していますが、どんなに勤務が忙しくても、週末の稼働が楽しみになっており活力になっています。サッカーで培ったチームワークは仕事にも活かしているのではないかと思います。

試合を見ることと審判をすることが、自分のモチベーションUPになっています。一緒に活動してきた審判仲間が、各大会で活躍しているところを見たときや信頼できる先輩と審判活動を続けられていることが幸せだと思えます。一人で出来ないことも協力を得ることで達成できることを審判活動から学んでいます。

そして娘の存在は大きく、自分の支えになっていると感じます。同じピッチに立ったとき、振り返りの中でしっかりと意見を述べ



られるところは、今までの審判活動や研修会に参加させて頂いた経験が活かされていると感じ、頼もしく思います。

今、自分自身も審判員として稼働しながらインストラクターとして審判員の普及、育成に携わっています。若い皆さんにはチャンスがあったら挑戦してもらいたいと思いますし、私自身、自分が出来ることを考え、北海道の女子サッカーの環境改善に貢献していきたいと考えています。

### 全国にいる仲間との出会い

(美季さん) 小学2年～小学6年まで少年団で活動し、中学入学後は新しい競技をやりたいという思いから中学ではバレー部に入部しました。部活引退後の中学3年生で母に誘われ国際審判員の方の講演に参加したことをきっかけにサッカー4級審判員の資格取得。高校では審判活動も兼ねてお世話になった小学校の少年団のコーチとして活動しました。全く指導経験はなかったものの低学年を担当してもらい、全学年の試合に帯同審判として参加しました。その後、高校2年で3級、高校3年で2級を取得しました。

3級に受かってすぐのころに静岡での全国研修に参加させて頂いたことが印象に残っています。全国からユース審判員が集まって、

同じ場所で数日間トレーニングや講義、試合を経験させて頂き、とても刺激を受け、審判がすごく楽しいと感じました。その後も、全日少やクラブユースの全国大会などの全国研修にも複数回参加させて頂いたことは貴重な経験になりました。全国での研修会では、自分の課題を見つけ、成長につながると実感できるだけではなく、たくさんの仲間との出会いが生まれ、再会や仲間の活躍はとても嬉しく、自分の支えであり、かけがえない存在です。

現在、看護学生ですが、2月の国家試験で合格できれば看護師となり4月から病院勤務の予定です。審判活動で培ったリーダーシップや積極性を仕事に活かしたいです。

試合をやる度に思うようにできず、どうしても良いのかも分からなくなるときもありますが、初心に戻ってみたり、前向きな言葉を下さるインストラクターの方々に沢山サポートして頂いて前を向くことができています。また、審判活動を経て得られた仲間の存在はとても大きく、サッカーが楽しい・好きだと思えたのは仲間のおかげだと思います。そうしてくれる人が少しでも増え、プレーをしながらでも審判もやってみたく興味を持ってくれたらうれしいです。私も育成や普及のために役に立てたら良いなと思います。



## 審判員の役割



審判員は、選手が最大限の力を発揮できるように、競技規則を学び、大会の位置づけや試合に出場するチームを理解して試合に臨んでいます。大会ごとに定められた資格を有する審判員が派遣されて、たとえば、北海道女子リーグでは、2級審判員以上が主審を務めなければなりません。実技・体力・学科の試験をクリアするためには、日々の研鑽が不可欠です。

試合後には、ファウルや不正行為の判断基準や審判員同士の協力、ゲームコントロールなどについて分析し、反省をもとに、

次の試合に向けて課題の改善を行っています。正しく競技規則を施行するために積極的に自分の考えを共有しています。また、講習会などを通じて競技規則の理解に努めています。試合終了までしっかりと走り切り正しく判定ができるよう、自分自身の課題や長所を把握したフィジカルトレーニングを皆積極的に行っています。

学生や社会人など様々な方が審判員として活動し、毎試合よい準備をして試合に臨んでいます。

審判委員会では、女性審判育成にも力を入れ、講習会を増やす取り組みを進めています。選手やチームがよりよいパフォーマンスを発揮できる審判、選手とともにサッカーそのものを楽しみながら、活動できる審判の仲間を増やしていきたいと考えています。

### 蝦名 隆幸

(公財)北海道サッカー協会  
審判委員会 女子担当

空知サッカー協会審判委員会はユース審判員の発掘・育成に力をいれています。

ブラクティカルトレーニングや実戦形式のユース研修会を開催し、審判員というサッカーへの関わり方があることを知ってもらうことからスタートした研修会ですが、最初の不安そうだった表情から一転し

と知りたいと意欲を持って参加してくれたことがとても印象的でした。

今後も審判の世界へ興味を持ち一緒に活動していくことのできる仲間を増やしていけるような事業を継続していきたいと思っています。

### 長浜 杏名

サッカー2級審判員  
空知サッカー協会 審判委員会  
女子部 部長



## 道新旗北海道女子サッカーリーグ 兼 皇后杯JFA全日本女子サッカー選手権大会北海道大会



第18回(2023年)大会優勝チーム  
札幌大学女子サッカー部ヴィスタ



2006年にスタートした北海道女子サッカーリーグは、北海道で最も権威のある女子サッカー大会に位置づけられます。2020年からは、皇后杯JFA全日本女子サッカー選手権大会北海道大会を兼ねることとなり、道内屈指の強豪チームが全国の切符と道新旗をかけて戦います。半年間におよぶ真剣勝負が、選手たちの成長を促しま

北海道女子サッカーリーグ  
第1回(2006年)大会優勝チーム  
北海道文教大学明清高等学校

道新旗全道女子サッカー選手権大会  
第1回(1981年)大会優勝チーム  
恵庭南高校

す。世界を制したなでしこジャパンのメンバーで、WEリーグファーストゴールを決めた高瀬愛実選手(北海道文教大学明清高校出身)も、本リーグで活躍した選手の一人です。また、全チームが、ホームゲーム運営を経験し、大会を支える力も養われています。

WEリーグが11月に開幕し今年3年目を迎えました。このリーグに審判として携わることが出来ることに幸せを感じています。WEの選手は3年目を迎え、プレーの質や強度がより一層増進して、どの試合も面白くて、こちらも夢中になってしまいます。W杯でのなでしこJAPANの活躍もあり、勝つことへ熱い気持ちなど意識の高さがプレーへそのまま現れているように感じます。

道リーグでは、活躍している選手層が様々な年齢や体格差、経験などの違いがありますが、私はそこが魅力だと思っています。今後は北海道のトップリーグから多くのWEリーガーが出てくれることが楽しみです、心がワクワクするようなプレーを引き出せるよう、携わる審判員は懸命に努力を惜みず、サポートしていけたらと思います。

### 稲葉 里美

サッカー女子1級審判員





## 北海道女子8人制リーグフェスティバル 北海道レディースエイトリーグ



北海道レディースエイトリーグ  
第1回(2012年)大会優勝チーム  
札幌ポニータFC

参加する選手もおり、ピッチには笑顔があふれ、ピッチの外では、選手のお子さんの応援の声も響きます。

北海道シニアサッカー連盟と北海道フットサル連盟の皆さんにも運営にご協力をいただいております、シニア連盟の皆さんには、審判やチームの帯同審判の指導にもご尽力をいただいております。

2012年、北海道内の女子サッカーの普及を目的としてはじまったレディースエイトリーグは、JFA登録に限らず参加できる8人制の大会です。レベルアップを目指して参加するチームだけではなく、親睦を目的としてこの大会のために選手を集めて参加するチームもあり、幅広い年齢層の選手が参加しています。現役中高生からシニア世代まで参加しており、また会場となる札幌の近郊チームばかりではなく、稚内や函館、旭川、釧路など道内各地からこの大会を楽しみにしている選手たちが一同に介して一つのピッチで戦います。親子2世代で



2023年度優勝チーム  
ノ-NAME

“ボールにたくさん関わり、ボールにたくさん触れる”ことでプレーの選択、判断力の向上、ポジショニングなど選手たちの成長にも繋がる大会となりました。

エイトリーグの審判や運営などありがとうございました。

ロッカフォルテとしてエイトリーグに参加するのは初めてでしたが、とても楽しい大会で選手たちの笑顔が絶えず、チームとして有意義な経験となりました。

同年代だけでなく、様々な年代のチームと戦わせていただき、8人制の良さである



黒坂 佳小里  
ROCCAFORTE TOKACHI  
監督

## 全道O-30女子サッカー大会 兼 JFA全日本O-30女子サッカー大会北海道大会



第35回(2023年)大会優勝チーム  
室蘭アイスバーズ

若年層からサッカー経験のある選手がO-30のステージに到達し、北海道の女子シニア世代が活気づいています。なでしこ2部のノルディア北海道や高校女子サッカーを牽引するチーム出身選手の活躍はも

全道O-30女子サッカー大会  
第1回(1989年)大会優勝チーム  
登別エストレリータ女子

ちろんですが、大人になってから競技をはじめた選手のレベルも上がっており、大会全体の競技水準が高まっています。

真剣勝負の中にも、試合内外でのコミュニケーションの中、随所で笑顔がみられ、サッカーをプレーし続ける楽しさを感じることができる大会ともいえます。

参加チームも徐々に増えており、今後の発展が楽しみな大会の一つです。

2023年度は、高崎先生の監督のもと、選手が集まり DIVERTI (ディベルティ) として大会に参加させていただきました。

高校女子サッカー部・女子サッカーチーム OG が集まり、年代や居住地も様々でしたが、そんなことを感じさせない一体感で、試合中も試合外もとても盛り上がり、終始笑いが絶えませんでした。また、高崎先生の昔と変わらないサッカーに対する情熱や姿勢に、選手達も気持ちあるプレーで応え、まるで青春時代を見ているかのような懐かしい気持ちになりました。

残念ながら準優勝という結果でしたが、選手達の楽しみながらも熱いプレーで戦う姿にとても感動し、私自身も熱い気持ちにさせて貰いました。

女性が大人になってもプレーを続けること

は容易なことではありませんが、サッカーの楽しさを知っているからこそ、仲間や繋がりがあからこそ続けられる事を改めて感じました。サッカーの楽しさやこの繋がりをどんどん広めていくと同時に、次回大会こそは優勝したいと思います!!



太田 郁美  
DIVERTI コーチ



## 道新カップ

### 北海道女子8人制サッカー大会



全道大会として各地区の代表チームが参戦する道新カップ。全道選手権大会としてトーナメント形式で開催していた皇后杯予選が、2020年度より北海道女子サッカーリーグを兼ねることとなったため、新たな全道大会としてスタートした大会です。各地区に1枠が与えられる8人制の本大会は、中学生から大人まで参加でき、女子サッカー普及の一助となっています。親子や姉妹で参加する選手や、久しぶりの交流を図る選手たちの姿も見られ、和気あいあいとした中にも真剣勝負が展開され、

私たちは普段少人数で活動し、道新カップが初めての公式戦でした。緊張もありましたが全員が楽しくサッカーをし、戦うという事を身に染みて感じる事が出来ました。試合が終わった後にチーム全員が楽しかったと言ってくれて参加して良かったなと感じました。試合に参加するまでは心配な

見ごたえのあるゲームが繰り広げられます。優勝チームには道新カップやメダルが授与されることもチームにとっては大きなモチベーションにつながっています。



家族で参加されるチームも

#### 道新カップ北海道8人制サッカー大会 第1回(2022年)大会優勝チーム 室蘭アイスバーズ



第2回(2023年)優勝チーム  
室蘭アイスバーズ

面が多々ありましたが、協会からの支援を頂き、皆で同じユニフォームに袖を通すことが出来て嬉しい気持ちでいっぱいでした。文教大学に関わって頂いた関係者の皆様のお陰で試合に参加することが出来ました。感謝の気持ちを忘れずまた道新カップに出場したいです。

#### 藤沢 萌

北海道文教大学女子サッカー部



## 大学



大学フェスティバルの様子

大学は、高校卒業後に高いレベルで選手を続けるための重要な受け皿の一つですが、道内には大学女子チームが少なく、大学チームとして試合経験を積むことが難し

(一財)全日本大学女子サッカー連盟への加盟大学数は86大学(令和6年1月現在)であり、その内北海道の大学加盟数は札幌大学のみとなっております。他地域では大学生同士のリーグ戦を行えるだけの大学数が加盟している中、北海道内ではリーグ戦が実施できない状況であり、大学生同士ならではの競技レベル向上や大会を支える運営能力の向上等、人間形成には欠かせない「目配り・気配り」を育むことができない、極めて厳しい状況にありました。そこで、何かできることはないかと考えて創出したのが、「北海道大学フェスティバル」です。

今年度は3大学(札幌大学・仙台大学・周南公立大学)の参加となりましたが、普段試合を行う機会の少ない地域の大学と試合を行うことで、選手たちから、「同じ大学生に負けたくないといったプライドや目の色を変えてプレーをする姿」を見て、競技力の向上は間違いなくここにあると感じました。

また、審判なども学生が中心になって取

いことから、2023年度から、全国の大学を招待して行う北海道大学女子サッカーフェスティバルを開催。札幌大学が中心となって実現しました。

また、北海道協会では、大学チーム支援制度を開始し、2023年度は文教大学が申請し、道新カップに出場しました。

学生たちは、女子サッカーを支える人材となっていくことも期待されており、卒業生たちが、指導者やチームスタッフとして道内で活躍の場を広げています。

組んでおり、常に周りを見て動いている姿勢を見て、ちょっとしたことかもしれませんが成長を感じました。今後は規模が大きくなればなるほど運営能力が求められますので、学生達には大会運営のありがたみを感じ、更なる人間力向上を図れるフェスティバルにしていきたいと考えています。

勿論、WEリーグやなでしこリーグ、海外のプロリーグに輩出していくことも大事ではありますが、このようなフェスティバルを通じ、社会に出ても恥じない人材を輩出することを目的としたフェスティバルにしていき、ゆくゆくは大学生の夏の全国大会にしていけるものとしていきたいです。

#### 氏家 新司

(一財)全日本大学女子サッカー連盟  
北海道サッカー協会女子委員(大学)  
(一財)全日本大学女子サッカー連盟  
北海道担当理事





## U-18 (高校生) 年代

U-18女子サッカーリーグ北海道  
2022年度大会優勝チーム  
北海道文教大学明清高等学校

北海道高等学校総合体育大会  
第1回(2011年)大会優勝チーム  
北海道大谷室蘭高等学校

北海道高等学校女子サッカー選手権大会  
第1回(1992年)大会優勝チーム  
札幌明清高等学校

北海道U-18女子サッカー選手権大会  
第1回(1998年)大会優勝チーム  
札幌明清高等学校

U-18年代には、クラブと高校の部活動の二つの活動場所があります。U-15年代から大人の選手と一緒にプレー経験を積むことのできるクラブにはU-18選手権があり、学校生活を含めて行動を共にする仲間と過ごす高校部活動は、インターハイと選手権があります。年間を通じて試合経験を積めるよう、2022年度より、クラブと高校部活動のいずれもが参加できるU-18女子サッカーリーグ北海道がスタート。U-18年代のレベルアップに大きく貢献しています。

2022年からU-18女子サッカーリーグが発足し現在10チーム(クラブ2チーム、高校8チーム)の2部制で開催しています。

### 立野 友之

(公財)北海道サッカー協会  
女子委員会 U-18部会長  
北照高等学校女子サッカー部監督



U-18女子サッカーリーグ2023北海道  
第32回(2023年)北海道高等学校女子サッカー選手権大会  
優勝チーム 北海道文教大学附属高等学校



第12回(2023年)北海道高等学校総合体育大会  
優勝チーム 北海道大谷室蘭高等学校



第26回(2023年)北海道U-18女子サッカー選手権大会  
優勝チーム クラブフィールズ・リンダ

各種大会や北海道女子リーグ、地域リーグと参加チームは重複しこのリーグに参加いただいておりますが、多くの課題がありこの2年間実施形態を変えながら、より多くのU-18年代のチームが参加できるリーグを目指しております。皆様のご声援よろしくお願いたします。

## U-15 (中学生) 年代



第31回(2023年)北海道U-15女子サッカー選手権大会  
優勝チーム クラブフィールズ・リンダ

北海道U-15女子サッカー選手権大会  
第1回(1993年)大会優勝チーム  
FC標茶レディース

U-15年代の女子選手の試合環境を充実させるために、2020年度よりU-15チームが戦うリーグ戦がスタートしました。初年度は1リーグ7チームでしたが2年目となる2021年には、2部制となり、全道各地で中学生による熱戦が繰り広げられるようになりました。同年からは、北海道U-15選手権大会とともに、優勝チームが全国大会

各地区の指導者や女子 U-15 部会員と共に、育成年代に関わる私たちは常日頃から【女子選手が活躍できる環境の向上】、【北



JFAU-15女子サッカーリーグ北海道2023  
優勝チーム 北海道リラ・コンサドーレ

JFA U-15女子サッカーリーグ  
2020年度(プレ大会として開催)優勝チーム  
北海道リラ・コンサドーレ

出場権を得られるようになりました。

北海道U-15女子サッカー選手権大会出場に向けては、リーグ戦上位チームとともに、5ブロック予選が開催されることとなり、指導者やチームスタッフ、地域協会の皆さまのご尽力のおかげで、北海道全体でU-15年代の普及と強化が進んでいます。

北海道女子チーム&選手のレベルアップ】、【次のステージへのバトンタッチ】を模索しているところであります。

今後も各カテゴリーと情報を共有し、北海道女子サッカーを盛り上げる一端を担っていきたく活動を続けていきます。

### 菖蒲 友幸

(公財)北海道サッカー協会  
女子委員会 U-15部会長  
十勝FSリトルガールズ 監督



# NATSUMI AKAMA

## 赤間 奈津美

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会 女子ユースダイレクター 道東担当  
 (一社)十勝地区サッカー協会 女子委員長・フットサル委員・キッズ委員  
 (一社)北海道フットサル連盟 女子委員  
 NOSAI北海道 十勝統括センター 十勝中部支所 業務課

選手、指導者、女子委員長と、何役もこなしながらも、  
 持ち前の明るさで十勝の女子サッカー界を引っ張る赤間さん。

選手や指導者仲間への優しいまなざしと、自分の役割を果たそうとする責任感が、  
 赤間さんへの信頼につながっています。

### 帯広南商業高校女子サッカー部へ

父と兄の影響で5歳くらいからアイスホッケーに熱中し、中学校ではソフトボール部に所属。ポジションはサードでした。中学3年の日韓ワールドカップが開催されたこともあり、サッカーに関心を抱き、帯広南商業高校に女子サッカー部があることを地元新聞で知り、進学しました。高校からサッカーを始めましたが、いつの間にかのめりこんで、卒業後は FC 帯広リトルガールズに入りました。現在も十勝 FS リトルガールズの選手として活動しています。選手として西川明花選手（現



伊賀 FC くノ一三重）と対戦したとき、「ウマすぎ。止めるの無理...」と思ったことを強烈に覚えています。スピードスケートの高木美帆選手と2年間同じチームで一緒にプレーしましたが、スピードも強さもあって、サッカー選手だったらどんな選手になっていたんだろうと思うことがあります。また、30歳を過ぎてからは室蘭アイスバーズの選手として O-30 大会に参加させていただき、人生初の全国を経験させてもらいました。

### 指導者として、 ユースダイレクターとして

リトルガールズのチーム事情で監督が不在となり、監督兼選手となりました。サッカー経験が少ない自分が監督を務めていたとき、中学生の選手がリトルガールズが増えてきました。その時期に男子社会人チームとの合併があり、監督を交代しましたが、指導者も継続することとなり、選手兼コーチとして活動しました。この間、C 級ライセンスや GKL-1



を取得する時間をくれたチームに感謝しています。FP や GK として選手と一緒にプレーしながら指導することで、選手の近くで言葉をかけ、プレーの難しさを肌で感じ、理解することもできました。選手兼任の指導者としての時間が、指導者としての自分を成長させてくれました。D 級指導者資格しか持っていないときでも北海道トレセンに参加させていただき、十勝トレセンの指導者としても経験を積ませていただきました。

また、北海道では、他の都府県協会に先駆け、女性のユースダイレクターが誕生し、山崎しおりさんがその任に就いていましたが、育休をきっかけとして、各ブロックに女性ユースダイレクターをという声があがり、道東ブロック担当として就任することになりました。ユースダイレクターとして、北海道トレセンでは主に U-14 を担当していますが、現在は、指導よりも要項作成や会場調整など運営の役割を多く担っています。キャンプでは女子選手が安心してトレーニングに全力

を出せるように、宿舎での責任者・運営の責任者を努めています。トレセンの下準備を終え、選手たちも指導者も全力でトレーニングに臨むことができたとき、安堵するとともに大きなやりがいを感じます。もちろん、運営だけではなく、指導でもレベルアップできるよう、フィジカルフィットネス C 級を取得し、選手たちに還元できるよう努めています。

### 女子委員長として

指導者としてだけでなく、大会運営にも携わるようになり、2022 年に遠藤前委員長から、女子委員長を引き継ぎました。十勝には中学生 2 チーム、高校生 3 チーム、社会人 1 チームの、合わせて 6 つサッカー登録の女子チームがあります。これら 6 チーム以外にもチーム登録はしていない団体があり、フットサル大会などに参加しています。そのような各団体の 15 名で十勝の女子委員会が構成されています。十勝のチームでサッカーやフットサルの大会を行っており、私はその責任者の立場であり、委員のみなさんと協力しながら試合の運営にあたっています。また、十勝地区協会では、各専門委員長が十勝フットサル委員会のメンバーとして活動します。小学生から社会人・シニアまでのフットサル大会の運営を通じて、様々な年代の大会を知ることができ、とても刺激を受けます。

目の前の選手にできることを必死でやっているうちに、様々な役職に就かせていただきました。サッカー界にいて女性活躍を後押ししてくれているのを実感します。本業は別にありますので、目の回る忙しさではありませんが、サッカーを通して多くの人と出会えたことは人生の宝物だと思い、自分にできることを精いっぱいやっていきたいです。



# MANAMI SUZUKI

## 鈴木 まなみ

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会 女子コースダイレクター道央ブロック担当  
小樽Corsa'rio GKコーチ・事務局  
小樽地区サッカー協会 女子委員会 普及委員

競技人生で悩みをかかえ、仲間のおかげで乗り越えてきた鈴木まなみさん。

ご自身の経験を活かして

選手に寄り添った指導を心がけてくださっています。

### チームスポーツの素晴らしさを知る

小学4年生のとき、小樽地区の女の子だけのサッカーチームに、2つ上の姉と一緒に参加しました。何も分からない状態で人数合わせのようなスタートでした。それでも、練習に励んでトレセンに参加し、中学生に入ってから、GKとして小樽コルサリオと小樽市立向陽中学校で活動しました。自分から始めたスポーツではなかったので、辞めたいと思うこともしばしばでしたが、増えていくサッカー仲間や、周囲で温かく励ましてくださる方々のおかげで中学3年生まで続け、進学時には選択肢に姉と同じ室蘭大谷高校が



思い浮かぶほどになっていました。

弱いメンタルを克服したくて高校では寮を選択。日々の洗濯や掃除、朝練や道外遠征など初めての経験が多く、毎日がめまぐるしく過ぎました。母子家庭でしたので、母が働きながらいつも一人で大変な家事をこなしていたことをはじめて実感しました。高校生のころは、相談や頼ることが苦手で、自分のキャパシティ以上のことを背負いこみ、3年生のとき部活に出られなくなっていました。力を過信し倒れた自分が情けなく、ふさぎ込んでいましたが、地元で入院している間にも同期の仲間、後輩たちが連絡をくれ、また、当時の大岩監督や顧問の庭田先生も親身話を聞いてくださいました。「一人で悩まないでなんでも言いなよ」「もっと頼ってよ」とあの日笑って復帰を受け入れてくれた仲間たちのおかげで、今もサッカーというチームスポーツの素晴らしさが忘れられず、離れられないのだと思います。

高校卒業後は、光塩学園女子短期大学に



進学し、小樽コルサリオで選手を継続していました。学生時代には、札幌大学のインカレ出場にあたって、GKとして出場させていただきました。社会人になってからも小樽コルサリオに所属し、北照高校女子サッカー部と合同で北海道女子サッカーリーグに参戦しました。今でも、道新カップやO-30大会に出場し、現役を続けています。

### 指導者として成長し、 いつか、バトンを渡したい

お世話になったチームに恩返ししたいと思い、指導者としての活動をはじめました。2004年から続くコルサリオは、WEリーグ選手も輩出しており、現在はU-15リーグに参戦しています。選手の成長にやりがいを見出し、前向きなスタッフばかりです。最近では卒業を機に卒団生が戻ってくるようになり、「お姉さんず」と呼ばれるOG・社会人・学生などでチームのOGを集めて道新カップやコンサドーレ・エスポラーダカップに出場しています。後志管内は市町村間に山間部が多く、人口減少も著しい地区ではありますが送迎や練習会場を工夫して、練習できるよう努めています。

指導者としてレベルアップを図るために、C級、GK-L1資格を取得。高校時代の自分の

経験を活かし、選手たちに「お互いのことをよく知り、考え、認め合うことをしよう」と声をかけ、ここで出会った仲間が実は一生の宝物になり得ることも伝えています。チームの指導だけではなく、小樽地区の総合型スポーツクラブでキッズスクールを担当させていただいたり、トレセンにも関わるようになり、JFAコーチの松田さんに推薦されて、コースダイレクター道央ブロック担当の任に就きました。北海道トレセン事業では、主にU-12女子トレセンを担当し、また道央ブロックトレセンの運営・指導や道央スタッフ間の連絡調整・連携の役割を担っています。普及に向けては、道央の普及コーディネーターの梶原さんと協力しながら活動しています。

指導者としても、自信がなくなることもあります。信頼できるスタッフに相談して乗り越えています。とくに、コルサリオの監督や他ブロック担当のコースダイレクターの4名には、いつも親切に相談にのっていただいています。今では、サッカーが与える挫折や困難などを選手たちが乗り越えていく瞬間から勇気をもらい、サッカーを心底楽しんでいる姿からは元気をもらっています。

北海道のサッカーが全国でも上位に通用するため、北海道一丸となってリレーションをとりカテゴリー問わず高めあえる組織になればと思います。まだ未熟なところはありませんが、力を尽くしたいです。GKの指導者として、GKプロジェクトにも力を入れたいと思っています。本村コーチという手本になる方もいらっしゃいますし、北海道協会の中川女子委員長が近くにくださるので、マネジメントや各方面への気遣いを間近で学ばせていただいています。指導も運営面でも成長し、いつか教え子がトップリーグに挑戦したり、指導者になってバトンを渡していけたらと思います。



YU IGARASHI

## 五十嵐 優

(公財)北海道サッカー協会 技術委員会 女子ユースダイレクター道北担当  
中富良野町立中富良野中学校サッカー部・旭川女子アチーブ コーチ

明るい笑顔で、話しやすい環境をつくってくださる五十嵐優さん。

サッカーが身近な競技になるための普及活動も

ご自身の役割だと教えていただきました。

## 中学教諭として

## 第二のサッカー人生がスタート

転校が多かったため1年ずつの活動ではありましたが、小学生のころは永山サッカー少年団(旭川市)に、中学では恵庭市立恵み野中学校サッカー部でボールを蹴っていました。中学卒業後は、サッカーから離れましたが、中学校教諭として旭川市立緑が丘中学校に配属されたとき、副顧問としてサッカー部に携わることになり、第二のサッカー人生が始まりました。緑が丘中学校は強豪校だったので、自分が役に立てるのかとても不安で

したが、当時7人いた女子選手とその保護者の方々が、私を頼ってくれているのを感じました。チームの中で、弱い立場になったり、体調面で相談したいときに、女性指導者がいてくれて心強かったと言ってもらえました。自分自身が中学時代に男子に交じってボールを蹴った経験も糧となり、選手たちに寄り添うことができたのではないかと思います。不安を感じながらも、この世界に踏み込んできてよかったなと感じました。しかし、自分が指導者として力不足だったのもあり、もっと役に立ちたいと心残りも感じていました。その思いがやがて女子選手にとってサッカーを続けやすい環境をつくっていききたいという気持ちに変化し、指導の勉強や、女子選手の育成に積極的に取り組むようになりました。

指導者としての歩みの中で、緑が丘中学校の監督の田中拓也先生に出会えたことは、幸運でした。学校の仕事、50名以上いる部活動の運営、ユースダイレクターの仕事、子育てと、何に対しても真摯に向き合っていらっ



しゃる姿は、なかなか追いつけないかもしれませんが、私の理想です。優先順位の見極め方や周りから信頼される質の高い仕事の仕方を見習っていききたいです。何より、コーチングによって選手のパフォーマンスが大きく変わることを目の前で教えていただき、指導者の役割や責任を学ぶことができました。

## 女子ユースダイレクター

北海道の技術委員会では、女子ユースダイレクターを全国に先んじて設置しており、山崎おりさんお一人でその任についていました。就任当初は、手探りだったのがあっていましたが、山崎さんのご尽力のおかげで、トレセン活動だけではなく、女子選手の育成に関わる様々な指導者との情報交換をし、つないでいくという大切な役割が確立されていきました。そのような中、山崎さんご自身の育休が一つのきっかけとなり、道内の各ブロックに女子ユースダイレクターを配置することがきまり、道北ブロックの担当者として私に声をかけていただきました。

道内5ブロックに一人ずつ配置された女子ユースダイレクターは、カテゴリごとに役割分担しながら活動しています。私は現在、

道北地区の女子選手の把握、北海道トレセンU12女子の運営を担当しています。5人の女子ユースダイレクター全員、尊敬できる方ばかりです。女子ユースダイレクターの在り方を形作ってくださった山崎さんはもちろんですが、同時期に就任した赤間さんは、トレセン運営や新規事業に対して中心になってくださっていて、見習うところが大きいです。全員が北海道の女子サッカーの現状を理解し、もっとよいものにしていくために、惜しまず努力しているので、自分もまだまだ頑張れる、と刺激をもらえます。

## サッカーを身近な競技にしていきたい

トレセンなどで小学校から関わっている選手や保護者が顔を覚えてくれて、試合で会ったときなど声をかけてくれるときには、やりがいを感じますし、選手が次のチームに悩むときには相談にのるなど、選手がサッカーを続けられるよう助言できたときは、嬉しく思います。選手と接するたびに、サッカーがもっと身近な競技になってほしいと強く思います。「少年団に入ってなかったから」、「高校からなんて遅い」など思わずに、始めたいタイミングで老若男女誰でも始められるような競技になったらいいなと思います。北海道のチームが全国で活躍するのは素晴らしいことなので、強化に力を入れることももちろん重要だと思っていますが、普及にも積極的に携わっていくことが、私自身の役割だと考えています。

現在、育休中で指導の現場から離れていますが、今後も、選手に近い存在であり続け、サッカーを身近な競技にできるよう微力ながら活動したいと思います。





## 女子ユースダイレクターの役割



女子ユースダイレクターは2017年に北海道サッカー協会技術委員会で新たに創設された役職です。男性のユースダイレクターは5ブロックに1名ずついらっしゃいますが、女性は北海道独自で、私1名でのスタートでした。最初は何をしいのかもわからないところから始まりましたが、当時道央のユースダイレクターで現在技術委員長の上田充士さんより、女子ユースダイレクターの役割は自分で作っていいとご助言をいただき、まずは北海道の女子サッカーの現状や男子の育成に関する取組を知ること、女子ユースダイレクターという存在があることを知ってもらうことから始めようと思い、様々な年代の試合やトレセン、会議の場に参加させていただきました。

同時期に、JFAより女子サッカー普及コーディネーターが各ブロックに配置されたこともあり、コーディネーターの方々、女子委員会、技術委員会、JFAコーチなど多くの皆様のご協力をいただきながら、北海道トレセンでの指導、女子フットボールミーティングの開催、北海道U-13(中学生)女子8人制サッカーフェスティバルの創設など、様々な取組を行ってきました。そして2021年より、男子と同じく各ブロックに女子ユースダイレクターが配置されることとなり、現在は女性5名で活動しています。この6年の間に、女子の育成、普及に関する組織や役割が整理されたこともあり、現在は各ブロックでの活動、北海道トレセンの運営・指導、女子サッカーデーの運営協力、来年度にむけたカレンダー調整など

### 育成に関わる人々をつなげる

を中心に行っています。

これまで6年間、自分たちの役割を模索し、様々な取組をやってみて、女子ユースダイレクターの役割は、「北海道の女子選手の育成に関わる人々をつなげること」だと思っています。各組織の役割やカテゴリーが明確化されてきた中で、組織間やカテゴリー間をつないだり、男子の育成に関わる方々とのつながりを持ち情報共有をしたりと、つなぎ役になればいい活動しています。選手にとっても、U-12からU-16、さらにはその先まで、「どこのサッカーの会場に行ってもいつも同じ人がいる」ということがちょっとした安心感につながってくれたら嬉しいと思っています。それは指導者の方々にとっても同じです。

まだまだ男子ユースダイレクターの方々と肩を並べるには足りないこともたくさんありますし、これからも活動していく中で求められる役割が変わってくることもあるかと思いますが、北海道でサッカーが女性の身近なスポーツとなること、そして北海道からなでしこJAPANで活躍する選手を育成することを目指して、多くの皆様と連携し、ご協力いただきながら進んでいきたいと思っています。

### 山崎 しおり

(公財)北海道サッカー協会  
女子ユースダイレクター札幌担当

## 国民体育大会 サッカー競技少年女子 (U-16) 北海道選抜



女子サッカー普及と強化の大きな施策として、2021年度からスタートした国体少年女子。北海道では、選抜チームをつくり、トレーニングを重ねて本番に臨んでいます。北海道女子リーグやU18リーグ、U15リーグ等女子選手に関わる試合はもちろんですが、男子チームに所属している女子選手をみるために、男子の試合も含めてU16年代の試合、北海道トレセンやブロックトレセンなどを監督を中心に視察。月1回行われるキャンプに招集して本大会のメンバーを決定しています。テクニックはもちろんですが、自立・自律したたくましさ、選択肢を常に3つ以上持ってプレーでき、まわりが疲れてきたときに頑張れることも、重視しています。

### トレーニングのたびに、 選手の成長を目の当たりに

スタッフは、夢の達成に向けて、北海道の女性の地位確立と選手たちの幸せを第一に考えるようにしています。「すべてのプレーを丁寧に、正確に」という共有すべきこ

だわりを定めるとともに、叱る基準も共有しました。

2023年は、月に1回トレーニングを行い、7月末にはフェスティバルに参加。直前合宿も行いました。トレーニングを重ねるたびに選手が相手を観て判断するプレーがみれ、毎回、選手の成長を感じられました。個人としてもチームとしても力をつけ、本大会に出場しましたが、様々な部分で他の地域との差を感じる結果となりました。私たち女子ユースダイレクターも選手と一緒に成長すべき課題があると感じました。

国体を通じて、私自身、藤代監督からサッカーの考え方、仕組みなどサッカーについて深く学ぶことができたと感じています。また、サッカーだけでなく、チームづくりの観点でチームマネジメントについても多くの学びがあり、今後の活動に活かしていきたいと感じました。選手とともに強い北海道を目指していきたいと思っています。



### 三澤 絢子

(公財)北海道サッカー協会  
女子ユースダイレクター道南担当



## MIYUKI SATO

## 佐藤 美幸

(公財)北海道サッカー協会 女子委員

北海道サッカー黎明期の強豪チーム・美香保リーボンズ設立の  
功労者である佐藤美幸さん。

現役引退後は、札幌のスクール事業やエイトリーグ運営に一から携わり、  
優しい笑顔で、北海道の女子サッカー普及の礎をつくってくださっています。



第5回全日本女子サッカー選手権大会(パンプレットより抜粋  
昭和59年3月  
国立競技場、西が丘サッカー場、(財)三菱養和会鳥嶋スポーツセンター

### 男性チームに飛び込み、 やがて女子チームを創設

中高とバスケットボール部に所属していましたが、高校の球技大会でのサッカーの楽しさを忘れられず、サッカーをできる環境を探して、札幌地区サッカー協会に電話で問い合わせました。70年代当時には女子チームはなく、友人の会社の取引先に社会人で活動されている方がおり、社会人一部リーグの美香保フットボールクラブを紹介してもらいました。当時の監督だった横山裕則さんには、サッカー初心者で、しかも女性である私を受け入れてくださったことを今でも感謝しています。入団して2年目の1980年、横山さんは「女子チームがないならチームで全面バックアップするから自分で作ったら」と、美香保リーボンズの立ち上げを後押ししてくださいました。山崎勇さんが初代監督を買って出てくださいました。リーボンズの初代メン



バーには、北海道フットサル連盟副会長の荃津都さんもいました。全国大会では、WEリーグの初代チェアである岡島さんや高倉さん(前なでしこジャパン監督)を擁するFCジナンに大敗し、レベルの違いをまざまざと見せつけられましたが、貴重な経験となりました。その後、山崎監督は、小学生から女子選手を育てなければと、自らリーボンズ Jr.(後のノーススター少年団)を結成されました。今でも尊敬する指導者です。

美香保フットボールクラブ、美香保リーボンズの素敵な仲間と出会えたことが生涯の宝物です。夫との出会いにもつながりました。現役時代から、美香保中で指導をしたり、サロンフットボールの普及活動をしていました。また、帯広光南、函館、札幌しらかばの各少年団での指導やフットサル道女子リーグの運営にも関わっていました。息子も物心ついたときから社会人の現在でもサッカー・フットサルに関わっていて、家族はサッカー中心に生活しています。

### 出産を機にサッカーから離れるも、 女子委員として普及活動に

ただ、出産に伴ってリーボンズを退部し、チームに関わることができなくなったことは心残りでした。そのような中、荃津さんから、鷺津さん(現北海道協会副会長)を紹介いただきました。大会運営のお手伝いの打診をい

ただきましたが、当時、土日祝日に勤務しなければならず、いったんはお断りをしました。その後、平日のみの仕事に転職をしたため、改めてお引き受けすることにし、2011年から現在まで、女子委員として活動しています。夫も息子たちも、私の活動を心から応援してくれています。皇后杯北海道女子サッカー選手権が函館で開催された1999年、当時函館に在住の私に荃津さん経由で声がかかり、鷺津さんと同じチームでプレーをしたご縁はありましたが、10年以上経過してご一緒させていただくとは思っていませんでした。

女子委員会では普及を担当し、とくにガールズサッカースクールに力を注ぎました。若い指導者の皆さんとスクール運営をさせていただく中で、女の子たちの成長を見守りました。スクールに来ていた女の子たちがクラブチームや高校、大学のチームで活躍している姿を見るととても嬉しくなります。運営に携わっている北海道女子サッカーリーグに参戦する強豪チームの中にも、スクール出身選手が何人も活躍しています。

また、大人の女性の普及活動の一環として、8人制の北海道レディースエイトリーグ事業を鷺津さんとともに2012年から育てていきました。JFA登録に関わらず参加を募るフェスティバルであり、全道各地から10代から60代までが参加しています。初心者でも参加しやすい大会であり、また、いったんサッカーを離れた女性がもう一度サッカーを楽しむきっかけにもなっています。北海道シニアサッカー連盟や北海道フットサル連盟の皆さんにご協力をいただきながら、大会運営にあたっていますが、2023年は16チームに参加数が増え、全力でサッカーを楽しんでいる皆さんの笑顔は私の活力です。これからも、誰もがサッカーを楽しめる環境作りのお手伝いを少しでもできればと思っています。



MICHIKO ITO

## 伊東 美智子

北海道シニアサッカー連盟 副理事長・事務局

伊東美智子さんは、きめ細やかな大会運営の手腕や正確な会計事務とともに、その明るいお人柄で、競技人口が年々増え続ける北海道シニアサッカー界を支えています。



## 経理経験ゼロから連盟の会計担当に

もともとは学生時代からスキーやテニスをしていて、スキーではSAJ指導員として、テニスではインストラクターとして子どもたちに指導をしていました。主人がサッカーをしていたので、息子たちもサッカーをするようになり、我が家はサッカー中心の生活。長い間家族の応援をしてきました。自分自身は友人の誘いで数年間だけ初心者のフットサルリーグに参加。息子たちが小学生のころにサッカー4級審判を取得、フットサル4級と公式記録員も取得しました。選手としてはベンチ要員でしたし、審判としても実働はほとんどありませんが、この経験が、今のシニア連盟での業務に少しは活かしているのかなと思います。

北海道シニアサッカー連盟は、北海道におけるシニアサッカーチームを統括する団体で、生涯スポーツとしてのシニアサッカーの普及振興を目的として活動しています。40歳以上・50歳以上・60歳以上・70歳以上(80



歳以上含む)の10歳単位のカテゴリーに分かれ、各カテゴリーの全国大会予選や、サッカーを楽しむ親睦を深めることが目的の全道大会の企画・運営など、サッカーとフットサルで競技志向ごとのリーグや大会を行っています。そして今後は女子のシニア年代の活動の場も広げていきたいと考えています。リーグや大会は自主運営を基本としているので、選手自らが役員となり、各種大会やリーグ戦の企画・運営や審判などを兼務しています。そのため、選手目線でお互いを尊重しあいながら良い雰囲気での活動をしています。

現在、私は、事務局長として、連盟の会計業務と主管する大会の運営業務を行っています。主人と同じチームの友人が連盟の役員をしていらして、声を掛けて頂いたことがきっかけとなりました。経理の経験も無く家計簿すら付けていない私が会計業務を任されて、最初はとても戸惑いましたが、皆さんに助けを頂きながら取組んでいます。

## 家族に支えられ、成長しつづけるシニアサッカーを支える

少子高齢化の中、シニアのサッカー人口は、右肩上がりに増えています。年齢別人口によるものでもありますが、サッカーを生業楽しむとする貪欲な姿勢とパワーにあふれる現役選手たちが、自分たちに今できることを考え、熱く議論を繰り返して、最大限にサッカー

を楽しめる環境を自ら作り出している結果だと思っています。シニア人口が増えている中でも、普及に向けた取り組みにも積極的ですし、全国大会で勝っていくための努力も惜しんでいません。和気あいあいとした雰囲気もありながらも、そういった姿を知っているからこそ、自分の業務にも自然と熱が入ります。女性の役員が少ないので、事業のなかでなにか女性だからこそ気付ける事があればお役にたてるかなあとってはいるのですが、逆に助けられていることが多いと感じることがしばしばです。年齢を重ねてもまるで少年のように楽しそうにサッカーをしている皆さんの姿を見て応援出来るのをとても楽しく感じています。ここで活動することでとてもたくさんの方とお知り合いになれましたし、その中には生涯の友人となった方もいます。この組織の居心地が良いので、今後も末永く仲間をいさせて欲しいと思っています。

年々シニア年代のチームは増加しているので、更に大きな組織なるとは思いますが、チームが増えれば増えるほど大会数・試合数も増え、課題も増え、自身の業務量も増えていきます。それでも周りにいる皆さんとの関わりが、私の気持ちをリフレッシュさせてくれますし、気持ちを若々しくさせて貰っており、大きな原動力になっています。そして、やはり、支えになっているのは身近にいる主人の存在でしょうか。現在も主人はシニアの現役選手で、息子達も指導者・プレイヤーとしてサッカーに関わっているので、私も関わり続けたいという気持ちになります。私自身で果たしたいという大きな野望はありませんが、今後は女子のシニア年代の活動の場も広げていきたいと考えていますし、皆さんがサッカーを生業楽しめるよう、サッカーやフットサルが出来る環境・場所を増やすため、できることをやっていきたいです。



# MAYUKO WATANABE

## 渡邊 真結子

ノルディーア北海道 マネージャー



た。入団当時のノルディーアは、降格間際で、すでに入替戦を控えており、はじめて試合に出てから数か月後に降格を決めました。もちろん悔しくはありましたが、落ち込む気持ちが不思議なほどありませんでした。自分にとってサッカーが必要だと自覚したとたん、自分を受け入れ、良い意味で開き直すことができました。そして、地元でサッカーをできる喜びが、やがて恩返しをしたいという気持ちに変化し、新しい目標「北海道の女子サッカーを盛り上げたい」ができました。そしてノルディーアの選手として約 11 年を過ごすことになりました。

引退後、現役時代から働いている職場に残りましたが、翌 2023 年からマネージャーとして再びノルディーア北海道に関わることを決めました。毎日が怒涛のように過ぎていき、目の前の仕事を必死でこなす日々です。そんな中でも、選手を経験しているからこそ、選手がサッカーに集中できる環境をつくりたいという思いが強く、また、誰よりもノルディーアが好きだという自負、そして、自分にとってサッカーが必要であるという思いが、忙しい日々を乗り越える原動力になりました。2023 年シーズン、結果は伴わなくとも、米山監督のもと、チームは一つになって戦いました。ホームゲームには OG が顔を出し運営を補助。目の前には全力でサポートしたいと思える選手たち。上を向くことができたシーズンでした。

今ようやく、一つのサイクルを終え、見えてくるものがありました。これから自分がどんな風が変わっていけるか楽しみです。サッカークラブは、フロントが整わないと強いチームになれないと思います。私自身がレベルアップして、選手にとってよりよい環境をつくっていきたいと思います。5年後も、10年後もサッカーに関わり続けていきたいと思っています。

JaSRA 女子サッカークラブ（現 AC 長野パルセイロ・レディース）に入団しました。すべての出来事がはじめてのことばかりで刺激だらけ。誰もがクオリティの高いサッカーをしていて、試合に出ることはもとより、練習についていくことさえ必死で、なでしこリーグにはじめて出場したときの記憶もないほどです。当時、種田監督には、厳しく指導していただき、全国リーグで戦うための責任の重さ、覚悟を教えてくださいました。試合に出ずにメンバーのサポートをする機会も多かったのですが、腐らずにチームのためにできることをしなければならぬ、という気持ちを学びました。自分が少しずつ変わっていききました。2 年間の学生期間を終え、社会人として選手を 1 年続けたのち、福岡 J・アンクラスに移籍。自分に求められているプレーが変わっても対応できる新しい自分も見つけつつも、思うように活躍できず、サッカーを離れる選択をしました。今思えば、もっとやれるはずという気持ちと現実のギャップに悩んでいたのだと思います。

### 自分にはサッカーが必要だと気が付く

なでしこジャパンに沸いた 2011 年、サッカーから距離を置いていた私に、ノルディーア北海道の選手にと声をかけていただきました。当初は断っていましたが、サッカー選手として活躍する夢に代わる目標や熱中できるものがないことに気が付き、入団を決めまし

### 一度距離を置いたサッカーと向き合い、

自分自身にとってサッカーの意味を理解したと話して下さった渡邊真結子さん。

誰よりもノルディーアが好きと胸を張り、選手経験を活かして、

マネージャーとしてのスキルを磨いていらっしゃいます。

小学 3 年生から美園サッカースポーツ少年団でサッカーをはじめました。男の子に交じって数人の女の子が所属していましたが、3 年生から卒業まで続いたのは、私だけでした。主にサイドハーフで、攻撃にも積極的に参加し、主力選手として試合に出場していました。この頃から当然のようにサッカー選手として活躍する将来を夢見ていました。

中学・高校は、札幌リンダ（現クラブフィールズ・リンダ）に。中高生と社会人が入り混じったチームだったので、学校とは異なる社会がとても新鮮に感じられました。様々な指導者の方に教わる機会もあり、選手としての



幅も広がりました。指導者のひとり、鈴木貴浩さんから「サッカーを通じて一流になろう」という言葉をかけていただきました。最初はよく理解できていなかったように思いますが、生意気なサッカー少女だった私の心にとどまり、サッカーだけではだめだということ、どんな人間になっていくのかを探求していくことが大切だということ学びました。

リンダでの選手生活の中で、多くの大人の選手が、asc adooma（ノルディーア北海道の前身）に移籍したことは大きな衝撃でした。北海道から全国で戦うチームをつくることに賛同した大人たちの熱い気持ちを子どもだった私は理解できず、悔しさもありました。もちろん、今は、そのときの大人の選手たちの気持ちがよく分かりますし、チームを作ってくれたことを感謝しています。

### 理想と現実とのギャップ

高校卒業後、北海道を離れ、大原学園





# CHIE HIRONAKA

## 廣中 千映

(一社)コンサドーレ北海道スポーツクラブ  
コンサドーレサッカースクールマスター

周りに恵まれてサッカーを続けることができたからこそ、  
今度は、自分自身がサッカーで恩返しをしたいという廣中さん。  
子どもたち一人ひとりに寄り添って、全員がサッカーを楽しめるスクールづくりを  
心がけてくださっています。

### 一人ひとりの思いに寄り添う

サッカーとの出会いは幼稚園の頃です。もともと、じっとしていられないタイプで、屋内で遊ぶより園庭で体を動かすことが好きな園児でしたが、父の影響で、自然とボールを蹴るようになっていきました。小学1年生から伊達西サッカー少年団に所属し、本格的にサッカーをはじめ、中学進学後は、男子チー



©2023 CONSADOLE

ムの北湘南サッカースクールと女子チームの室蘭アイスバーズの両方に所属。競技にのめりこんでいき北海道大谷室蘭高校へ進学しました。高校では大岩真由美監督から一人ひとりの思いに寄り添う姿勢を学びました。選手主導のチームづくりをされる方でしたが、選手が困っているときには選手の思いや考えに寄り添って、助言をくださいました。さらに、オフザピッチの場面で、挨拶をすること、周りへの感謝が大事だということも学びました。高校生活では、寮生が多い中、1時間かけて自宅から学校へ電車で通っていましたが、電車は1時間に1本ほどしかなく、両親に送迎してもらうこともありました。不自由なくサッカーに向き合い、多くを学べたのは、両親や指導者、そしてチームメイトのおかげです。

大学から北海道を離れ、大東文化大学女子サッカー部に入部。4年時には主将を務めました。1年の頃、前十字靭帯を断裂したことも影響し、また部員が50名いる中で、試合に出場できない日々もありました。しかし、



©2023 CONSADOLE

どんな立場であろうと、誰よりもチームのために闘い、自分にできることに一つひとつ取り組むことが、チーム力向上に繋がることを学びました。人数の多い組織の中で、チームの目標を明確にし、同じ方向を向いて闘えるよう、部員一人ひとりとコミュニケーションを取ることで、そして、それぞれの考え方をすることを大切にできたのではないかと思います。

### 北海道に恩返しを

大学卒業後、コンサドーレ北海道スポーツクラブの一員として、指導の現場に立っています。これまで学んできた一人ひとりの考え方を知らうとする姿勢は、今の職場でも大切にしています。サッカースクールには様々なレベル、目的をもった子どもが通っていますが、コーチという立場で、子ども一人ひとりの考えや性格を知り、全員がサッカーを楽しめるようなスクールづくりを心掛けています。最初は上手くいかないことが多かった

子が、できることが増えて嬉しそうに楽しそうにサッカーをする姿を観ることができたときは、大きなやりがいにつながっています。また、レベルアップを目指してスクールを辞めてアカデミーに所属を変えることになる子がいたときは、当然寂しい思いもありますが、その子にとって少しでも何か力になることができたのかなと感じます。

コンサドーレサッカースクールは、札幌だけではなく、旭川・士別・釧路・中標津・室蘭・恵庭・岩見沢など全道各地で開催されています。「北海道から世界へ」というコンサドーレのトップチームのスローガンとともに、「北海道にスポーツのある日常を」という社団法人としての理念を掲げた活動は全道各地に広がっています。経験豊富な指導者の先輩やプロ選手として活躍していた方もいらっしゃいますし、女性のスクールコーチも複数人おり、心強い先輩や仲間にも恵まれていると実感します。

これまでも、私は周りに恵まれていると感じてきました。とくに家族は、選手だったころには、どんなに遠い場所でも試合にかけつけてくれ、道外でサッカーを続ける後押しをしてくれました。周りへの感謝の気持ちが、スクールコーチとして働くことを決意した大きな理由であり、仲間や指導者の皆さん、両親、そして、北海道に、何か少しでも恩返しができるかと考えています。私たちの組織は、サッカーはもちろん、コンサドーレはカーリングチームとバドミントンチームもあります。私も、指導者として研鑽をつみながら子どもたちの声に耳を傾け、スポーツを通して一人でも多くの方を元気にしていくことで、恩返しをしたいと思っています。

# KUMI NUNOKAWA

## 布川 久実

クラブフィールズ・リンダ コーチ  
新札幌整形外科病院 手術室看護助手

長く北海道の女子サッカー界を牽引し続けているクラブフィールズ・リンダ。  
選手から指導者へと立場をかえながらもリンダ一筋の布川さん。  
選手たちがサッカーを通じて得られる経験を強さや優しさに変えられるよう、  
温かく見守っていらっしゃいます。

### 歴史あるクラブの選手から指導者へ

キャプテン翼の影響でサッカーに興味を持ち、社宅の子どもたちとボールを蹴り始めていましたが、女の子がサッカーチームに入ることが難しいころだったので、小学生のころは剣道を習い、中学ではバスケットボール部に所属していました。バスケ部の顧問の先生に一生懸命取り組みれば、自分も変わるし、周りの見る目も変わってくると言われたことは今でも大切にしている、現在の指導や仕事の中に生きています。



サッカーへの関心は、高校になってからも消えず、1年生のときに担任の先生に札幌リンダを紹介してもらい、女子サッカーチームで活動ができるようになりました。

札幌のサッカーは、札幌大学の柴田先生の指導のもとでサロフットボールを基盤に発展し、西岡女子クラブ、エイトピース、はばたけが発足。札幌リンダは、はばたけで活動していた故安田和子さんによって立ち上げられました。当時の監督は、故中村寿哉さんです。1992年に全道優勝し、全国大会に出場した初戦で九州代表 3-2 で逆転勝利しました。これが全日本女子大会での北海道代表としての初勝利でした。その後、ほくでんスポーツフィールズとの合同チームを経て、2005年からクラブフィールズ・リンダと名前を改め、2010年には、全日本 U-15 女子サッカー選手権で3位入賞を果たしています。現在も、北海道内のトップリーグである北海道女子サッカーリーグ（皇后杯予選）に参戦しながらも、U-15、U-18 のリーグ戦にも参加



し、U-15（中学生）年代の受け皿として早くからその役割を果たしています。熊谷紗希選手もかつてリンダに所属していました。多くの人に支えられてきた歴史のあるチームを誇りに思っています。

私自身、長らくリンダの選手として活動する中で、指導にも関心を持ちはじめ、現役の頃から指導者の道に進みたいとチームスタッフに伝えており、引退後、コーチに就任しました。自分がこのチームの出身選手であるため、選手のために貢献したいと思う気持ちは強いと思います。コーチとしての指導が主ですが、男性スタッフには話せないような、何でも話せるような選手に近い存在でいられるように心がけています。練習や試合での勝ち負けを経験しながら、選手が日々、人としてもサッカー選手としても成長していく姿を見ることがやりがいとなっています。

### 選手には、様々な経験を強さや優しさに変えてほしい

選手のときも指導者としても、たくさんの仲間ができ、はげましお互いを高めあえることができている。もちろん、辛い経験もありましたし、辞めたいと思ったこともあります。それでも仲間に支えてもらい、アドバイスをいただく中で、角度を変えたもの見

方に気づかせてもらえ、自分自身が辛さと真正面から向き合い、克服していくことができました。両親や仲間たち、友人、そして選手たちが私の支えになっていると感じます。

指導者は専任ではなく、普段は、整形外科手術室の看護助手として勤務しています。手術が円滑に進むよう、事前準備が必要で、先生、看護師、患者様が困っていないか、常に目くばり・気くばり・心くばりの連続です。まわりの状況をよくみることは指導者にもつながるところもあり、この経験が活かされていると感じます。職場の皆さんも、サッカーに関わることを前向きにとらえてくださっており、ときに支えてくださっています。

北海道は冬が長く屋外でサッカーができる期間が短いことや広域性への課題もあり、本州と比較して環境要因で後れをとることがありますが、北海道全体で知恵をしぼり、ベストのやり方を考えて、普及・強化とも向上していければと思います。私も、リンダの一員として、自分にできることを精いっぱいやっていきたいと思っています。少しずつ歴史が積みあがってきているクラブですので、卒団性が様々な分野で活躍しており、今後何かしらのネットワークができて、チームに活かせたらと思っています。卒団性たちが指導者やスタッフとして活動できるようなサポートもしていきたいです。

選手は、良いことも悪いことも経験していくと思いますが、その経験が自分を上げていくし、強さや優しさになっていくと思います。自分を大切にしながら、様々な経験をしてほしいと願っています。私自身、年齢や体力的に厳しくはなっているのですが、サッカーもフットサルも日々変化し、進歩していているので、本を読んだり、講習会に参加して指導者としてレベルアップし、選手に還元したいと思っています。



## IKUMI KUROSE

## 黒瀬 育美

北照高等学校女子サッカー部 顧問



てサッカーを取っても魅力的な人を目指した指導を目指しています。プレイヤーとしてスポーツに全力を注げる期間はあっという間に過ぎます。周りにはいろんな楽しいことがあります。今しか出来ないこと、目指せない事を大切に過ごしてほしいと願っています。

### チーム自体が原動力になり、成長させてくれる

今や、北照高等学校女子サッカー部というチーム自体が私の原動力です。監督、コーチ、卒業生や保護者も含め、チームが苦しい時は一緒に戦い、イベントは全力で楽しみ、私も一緒に仲間に入れて支え合ってくれた選手がいたからこそここまで続けることができました。そして、サッカーを何も知らない私が色々なことに挑戦したいと思えるような環境を作ってくださっている北海道の女子サッカー界の皆さまを尊敬し心から感謝をしています。今まで関わることがなかった女子サッカーを通じて、新しく出会えた方々がいることは、私を成長させてくれています。

いつか、サッカーの競技経験ないの?!と驚かれるくらい、指導もできて、審判もできて、ボールも蹴れて、体育の先生としても女子サッカーのコーチとしてもストイックな姿を見せて、将来もずっとサッカーを続けていたいと思う選手が一人でも増えてくれる、そういった存在になりたいです。そして、北海道優勝、全国大会出場にふさわしいチームへとレベルアップしていけるように、選手や監督の手助けができるよう努力したいです。北照でサッカーがしたいと思って来てくれた選手を全力で可愛がり、サポート役として日本一を目指したいです。

競技経験がないとは思えないほど、指導者としても審判としても大車輪で活動されている黒瀬さん。今や北照高等学校の顧問としてだけでなく、小樽地区、U-18リーグ運営に欠くことのできない存在です。

### 部活動のすばらしさを伝えるために保健体育教員に

ももとの専門競技は小学生の頃から続けているソフトテニスで、学生時代は全国中体連、インターハイ、インカレなど各カテゴリで全国大会に北海道代表として出場経験があります。私の人生の中で、部活動における経験はものすごく大きく、部活動から多くを学びました。保健体育の先生を目指したのも、中学の頃のソフトテニスの顧問だった体育の先生がきっかけです。中学や高校スポーツに対する思いが強く、北照高等学校に大学新卒で保健体育科に採用していただいたとき、スポーツコースで唯一の女子部である女子サッカー部に携わりたいと、学校と監督にお願いしました。

北照高等学校女子サッカー部は2012年に発足し、監督の立野先生と初心者のたった一人の部員から始まり、創部12年を数えます。この12年間のうち11人でプレーできた年は少なく、少ない人数だからこそ指導者と選手の

信頼関係を厚く築くことができました。特に立野監督の熱い指導が選手たちの心を掴み、人数が少なくても最後まで諦めずに頑張ってくれた選手たちのおかげで現在のチームへと繋がっています。監督、私の2名体制ですが、日頃から沢山の方々が本校女子サッカー部を応援して下さい、ご厚意で足を運んでくださる外部指導コーチもいらっしやいます。

最初は遠征時等の女子選手のお手伝いからはじめ、サッカーは保健体育科の教員を目指して勉強した程度しか知識の無かった私でしたが、周りの方々に支えていただき、公認C級コーチ、3級審判員、ライフキネティックチームトレーナーと資格取得の機会をいただきました。審判や指導者資格取得を通じて出会った方々のおかげで、日常のトレーニングから実践して学ぶことができたため、自分なりにサッカーへの関わり方を見つけ出すこともできました。今では、ウォーミングアップやフィジカルトレーニング等のボールトレーニング以外の部分を任せてもらっています。

選手に接するときには、日常から遠征等も含めて、女性同士だからできる選手との関わりを一番に心がけています。別の競技だったからこそ見えた新しい発見があり、自分の価値観や視点を変えた考え方ができるようになったことも強みとして指導に活かしたいと考えています。挨拶、言葉遣い、礼儀作法、気配りや思いやりの心など、サッカーを通じ



## SHIGEKO KAJINO

## 梶野 滋子

(一社)北海道フットサル連盟 常務理事・女子委員会委員  
北海道Corrida・de・Toros.L選手  
セントラルフィットネスクラブ24東苗穂勤務

フットサルはご自身の生きがいという梶野滋子さん。

フットサルが女性の生涯スポーツになるために、  
常に前向きに、選手にも運営にも、挑戦を続けていらっしゃいます。

## 高校でサッカーに出会う

小学1年生から水泳をはじめ、5年生からは選手コースで朝は週2回、夜は週5回と練習漬けの日々でした。中学に入ってからバレーボール部に所属。サッカーとの出会いは、高校生でした。入学してすぐに、札幌明清高等学校女子サッカー部の2年生に声をかけられました。先輩によると、輝いていた、とのこと。その言葉に従って入部しました。先輩の言葉が正しかったのか、2年次には副キャプテンを3年時にはキャプテンを務めるまでに至りました。

高校卒業後、住み慣れた北海道を離れ、埼玉県武蔵丘短期大学女子サッカー部に入部しました。当時、札幌明清高校の女子サッカー部で道外へ挑戦した選手はまだおらず、当時の監督に初だと言われました。関東の大学での挑戦は、大きな経験となりました。一つ上の「桃さん」という先輩の上手さに衝撃を受けました。卒業後にサッカーから離れられてしまったのですが、辞めていなければ代表選手になれたのではないかと思うほどでした。私自身はサッカー中心の生活を送り、関東大学女子サッカーリーグではベストイレブンとなり、関東大学女子選抜にも選ばれました。また、宴会部長としてチームを盛り上げることに全力を出し切りました。

大学卒業後に北海道に戻り、社会人チームの札幌第一レディースに所属し、大阪なみはや国体時に北海道選抜として戦いました。その後、24歳でサッカーを辞めました。10年後の34歳で友人にフットサルに誘われ、現在の活動につながっています。怪我に悩ま



されながらの活動ではありますが、無理をしないと決めてフットサル選手を継続しています。とにかくたくしく、すでに生きがいになっているかもしれません。若い子ともふれあったりすることで元気をもらっています。

## 運営へのチャレンジ

エンジョイチームに参加しているときに、北海道フットサル連盟の荃津副会長に声をかけていただき、運営に関わるようになりました。その年の自分のテーマが「頼まれごととは試されごと」と決めていたこともあり、チャレンジすることにしました。

現在は、北海道フットサル連盟の常務理事として、女子委員として活動しています。また、北海道女子フットサルリーグの副委員長として、1部・2部の対戦表を作成したり、試合当日の運営を担当しています。女性は、結婚、出産、育児、などでフットサルから離れたくなくても離れていってしまう選手が本当に多くいると思います。そういう選手でも続けていけるようなリーグに出来たらと思いついて、リーグが円滑に進むよう、サポートに努めています。1年間のリーグを無事に終わらせたときには安堵するとともにやりがいを感じます。

北海道フットサル連盟の役員の方々は、男性女性関係なく仲が良いと思います。優しく頼りがいもあります。まだまだ、知識不足の私ですが、何かあるたびに相談にのってもら

っています。とくに、荃津副会長には何度も助けられました。知識も豊富で勉強家でちょっぴりお茶目な方ですが、北海道の女子フットサルの環境がよりよくなるよう、ものすごく考えていらっしゃいます。女子の普及のための北海道エスクエプログラムも荃津さんのご尽力で実現しました。

## 夫の協力、職場の後押し

フットサル連盟の役割を担うために、夫の協力が大きな助けになっています。家で作業をしていても悩んでいると手伝おうかと声をかけてくれます。夫の協力なしには続けることができなかつたと思います。また、職場である東苗穂店の乾店長、風間副店長をはじめ、職場の皆さんが、連盟の活動を好意的に見守ってくださっていることにも後押しされています。また、職場では、子供から高齢者まで、色々な年齢層の方が元気で身体を動かして生き生きしている姿を目の当たりにし、運動の素晴らしさを実感します。フットサルも、女性が歳を重ねてもやり続けられるスポーツになるよう、環境づくりに貢献していけたらと思います。

北海道のフットサル人口はまだ少ない状況ですが、色々な方々にフットサルの魅力も感じて頂きたいので、是非一度北海道女子フットサルリーグやエンジョイリーグなどに足を運んでいただきたいです。





## フットサルの取り組み エスクエラプログラム

### 育成年代へのアプローチ 「学校」という名のプログラム

女性にとっては、屋内で5人で行う競技の特性が、はじめやすさや継続のしやすさにつながり、北海道では多くの女性の社会人フットサルチームが活動しています。一方で、育成年代に特化した取り組みが課題となっていました。冬の長い北海道では、サッカーのチームが、10月ごろからフットサルに活動の場を変えることから、普及が進みつつあるU-15年代のサッカーチームからも、U-15年代単独での試合経験を積ませたいという声が高まっていました。そこで、10月から翌3月にかけて行う「NADESHIKO リーグ」にU-15年代のリーグ戦を行うこととなりました。

しかしながら、直後にコロナ禍に突入し、様々な活動がストップする事態となりました。しかしこの時間を必要な事業を見つめなおし、よりよい事業に向けた思考する期間と捉え、事業を再考しました。その結果、誕生した事業がエスクエラプログラムです。エスク



エラとは、「学校」を意味しています。授業だけではなく学校祭やクラブ活動など、様々な経験ができる「学校」のように、育成年代の女子選手たちが、フットサルに関する大会やクリニック、フェスティバルに参加できるプログラムとして構成しています。

### チーム事情に配慮した 柔軟な参加要件

プログラムは、U-12、U-15、U-18、U-23のカテゴリーを設けました。それぞれに、会場費のねん出が課題ではありますが、totoの助成金の枠組みを使って展開することができています。初年度、実際に展開してみると、このプログラムの柔軟な点が、かえって分かりづらさを生んでしまったこともありました。たとえば、U-15年代の参加要件には、U-12の優れた選手が参加できたり、1名だけオーバーエイジ枠を設けるなどしている点に疑問が寄せられることもありました。しかしながら、普及と育成を兼ねたこのプログラムの意図が徐々に浸透していていると感じています。

### 女の子の競技継続のために

今後は、このプログラムの枠組みを拡大させ、一つのパッケージとして全道各地のフットサル仲間の力を借りて、取り組みを進めたいと考えています。すでに今年度は、釧路で実施しましたが、来年度も協力していただ



る地区が決定しています。

中学生に入ると女の子はサッカーを継続しなくなってしまうという課題はまだ残っています。エスクエラプログラムを通じてU-15年代での競技継続につながることも大きな目的の一つです。

真剣勝負も学ぶことも、楽しむことも大切にし、この「学校」が女の子がボールを蹴る楽しさをずっと持ち続けることに貢献できればと思っています。

### 荃津 都

(公財) 北海道サッカー協会 理事  
(一社) 北海道フットサル連盟 副会長



### 日本女子フットサルリーグ エスポラーダ北海道イルネーヴェ

私たちエスポラーダ北海道イルネーヴェは、クラブ理念である『道産子の夢をのせて』を掲げ、日本女子フットサルリーグで戦っています。

北海道の女子選手たちが長くフットボールとして活躍できる場所を作るために2016年に発足され、子供たちの憧れや目標となるような魅力あるチームを目指し日々努力しています。北海道から全国へ、そして世界へ羽ばたく選手が生まれること、選手として輝く可能性を広げることが、私たちがトップリーグに属している意義だと感じています。

イルネーヴェの選手たちは、年齢も幅広く個性溢れる選手たちです。試合で実力を発揮するためにも、日々の積み重ねを大切に、常に充実感を求めて練習に励んでいます。現時点ではまだ、全国のトップには手が届いていませんが、着実に歩み階段を登っているはずで、北海道のフットボールを女子フットサルからも盛り上げていきたいと思っています。

### 菅野 大祐

エスポラーダ北海道イルネーヴェ  
監督



## 札幌ブロックの取り組み



### 選手の活動の場を充実させたい

札幌地区・ブロックでの普及活動として、様々な活動を行っています。

札幌地区サッカー協会では、各事業サッカーをすでにやっている選手はもちろん、

登録をしていない選手や初心者でも気軽に始められやすいように、カテゴリーを分けて、それぞれに合ったレベルを各自で選ぶことが出来るように工夫をしたり、どこで活動しているのか分からない方には、インスタグラムやXなどを利用して情報提供を行っています。

普及コーディネーターとしては、札幌地区サッカー協会や各種別・各カテゴリーとの連携をとりながら、女子に関わるスタッフや指導者の育成も視野に入れ、中学生年代までがメインにはなっていますが、選手達の活動の場を充実したものに出来るようにしていきたいと思っています。

### ■ガールズスクール札幌ブロック

5月～2月/月1回(土曜日)/16時～18時  
会場：SSAP屋内競技場  
対象：小学生対象

### ■札幌ガールズサッカーランド (JFAなでしこひろば)

不定期開催  
会場：主にSSAP・札幌大学体育館など  
対象：幼稚園～中学生  
札幌大学女子サッカー部ヴィスタにご協力いただき、ヴィスタの選手が指導にあたります。

■JFAレディース/ガールズフフェスティバル  
年1回/夏期開催  
会場：SSAP天然芝



対象：5歳以上

### ■SFA U15レディース・U12ガールズ交流会 年1回

会場：札幌市内  
対象：小学6年生・女子チームに所属していない中学生と札幌地区所属のU15女子チーム

保護者の皆様へは、U15女子チームの紹介や中学生に上がる際の登録などの情報をご提供しています。

### 中村 麻衣

普及コーディネーター  
札幌ブロック担当



## 道央ブロックの取り組み

### 選手の活動を充実させたい

道央ブロックは空知・千歳・北空知・小樽の4地区から構成されています。

道央ブロックの女子チームは小樽2チーム・空知1チーム・千歳1チームで4チームしかいないため、他のブロックとの交流が多いのが現状です。

### ■女子トレセンと女子サッカースクールの共同開催

毎週月曜日(年間)

4年生～6年生のトレセンと1年生～3年生のサッカースクールを北照高校さんのご協力をいただき、体育館をお借りして開催しています。

### ■倶知安でのサッカースクール

月1～2回(冬季間11月～4月)

豪雪地帯でもあるので、冬季間の選手や保護者の移動の負担を減らすために、倶知安小学校の体育館をお借りして、倶知安・ニセコ・岩内等の選手を対象に1年生～6年生

U-12年代に関しては各地区ともトレセン活動が積極的に行われて、その他にもガールズサッカースクールを活用した取り組みや、なてしこ広場・各地区で行われているスクール等で沢山の小学生が活動していて、各地区の担当者の方々のご協力もあり女子選手の活動の場が増えてきています。

を対象にしたサッカースクールを開催しています。

### ■JFAレディースサッカーフェスティバル 年1回開催

今年度はフットサルで行い、札幌・室蘭・千歳・小樽のチームが集まり交流会を行いました。

### ■小樽地区女子フェスティバル

年1回開催

毎年4月に開催して、室蘭・旭川・札幌・岩見沢等、遠方から沢山のチームが参加してくれています。



### 梶原 康裕

普及コーディネーター  
道央ブロック担当



## 道南ブロックの取り組み



### 様々な年代の選手へのアプローチを

道南ブロックには、渡島、檜山、胆振、日高管内の36の市町村の中に高校とクラブチーム合わせて7チームしかありません。そのため色々なチームとの対戦の機会が少ないです。又、リーグ化によって大会も減り、対戦や交流の機会が少なくなっています。18歳以下の選手は、トレセン活動や全道大会がありますが、それ以上の年代の選手は日々、チームで練習をしても女子との試合の機会が少なくモチベーションの維持も難しいものがあります。女子サッカーを支え繋いでいく年代の選手たちへのアプローチも重要だと考えています。このようなゲーム環境の中、各地区協会の女子委員会や女子チームが中心となって、交流会やフェスティバルが行われています。

### 各地区協会の工夫と努力

室蘭地区では、サッカーやフットサルの大会を行っており、その中でも「MFL KOSEI CORPORATION Ladies Cup」は道

内の16チームが参加し、選手も約300名が参加して行われました。この大会は、距離が遠かったりしてなかなか対戦できないチームと試合のできる貴重な機会となっています。また、「室蘭市女子フットサル選手権」や「函館地区フットサルフェスティバル」などでは、小学生と一般が同じ会場で開催が行われ、サッカーを続けていける環境があることを知らせる機会にもなっています。小学生以下対象に苫小牧地区ではなでしこ広場やキッズスクールが行われ、小学生対象に、室蘭地区では、今年度から「アイスバーズスクール」も行われています。函館地区では、小学生の保護者に向けて市内の中学生がどのような環境でサッカーをしているのかを知らせる説明会を実施し、情報提供をしています。中学生以上を対象に登録、未登録に関わらず集まって試合ができる環境「WE-GAME」の日を月1回設けています。

各地区協会の協力と様々な工夫によって、サッカーの登録数が全体的に減少している中、女子が大きく減少せず横ばいの状況が維持できているのだと思います。



浅利 清美

普及コーディネーター  
道南ブロック担当

## 道東ブロックの取り組み

### 広大な地域で地区同士が協力しよう

道東ブロックは、十勝・オホーツク・根室・釧路の4地区協会が構成され、管轄する面積としては北海道の約4割を占める広大な地域です。当ブロック下では、U-15女子カテゴリでは4チーム(十勝2、オホーツク・根室合同1、釧路1)、U-18女子カテゴリでは3チーム(全て十勝)が、北海道サッカー協会主催大会に参加しています。十勝地区では女子サッカーリーグが開催されており、また各地区には社会人を対象としたチーム(カテゴリ)もあり、サッカー・フットサルが盛んな地域の一つと言えます。

4地区全てにおいて、毎年JFAレディース・ガールズサッカーフェスティバルが実施されていることから、コロナ禍前は開催期日を意図的にずらして相互に参加し合っ

ていました。現在、U-15・U-18の道リーグがスタートしていることから日程が過密でスケジュール調整が難しい状況ですが、今後も4地区が連携して多様な試合環境を整えていく必要性を強く感じています。

私は普及コーディネーターとして道東を担当していますが、各地区で行われている様々な取組を道東4地区で共有する橋渡しくらいしかできていません。一方で、数年前に設立された『道東圏サッカー協会』では役員の皆さんが女子サッカーに非常に関心が高く、普及コーディネーターの存在も早い段階で認知していただいております。多くの可能性を感じており、各地区女子委員長と協議して具体的な取組や改善に繋げていきたいところです。当面の課題は、女子サッカー未経験者が年齢を問わず気軽に参加でき、継続していけるような取組を行っていくことだと考えています。

今年度初めて道東圏サッカー協会の女子事業として「道東レディース・ガールズフットサルフェスティバル2023inオホーツク」を11月23日(木・祝)に北海道立北見体育センターにて開催しました。数年前のジョイントミーティングで話題にあがった『道東の女子サッカー選手が一堂に会する場を創出したい。』という思いが、オホーツク地区協会女子委員長の藤森さんを中心にした多くの皆さんのご尽力により実現しました。残念ながら、インフルエンザ等の流行によ



りガールズの部は急遽中止になりましたが、レディースの部では4地区から複数チームを編成して参加し、総計8チームで熱戦を繰り広げました。次年度以降も、継続予定です。



春名 健司

普及コーディネーター  
道東ブロック担当

## 道北ブロックの取り組み



### 最北の地から女子サッカーを ～小さな芽から大きな大輪へ～

道北ブロックは、北は稚内から南は占冠、西は増毛までという広範囲の地域です。このような広範囲の中で、旭川市以外の市

町村における女子選手数が非常に少ないというのが今までの現状でした。しかしここ最近、4年生以下の各カテゴリーの大会やフェスティバルに参加している旭川以外のチームに女子選手の姿が多く見られるようになってきました。つまり、町村での各チームの構成上、女子選手の必要性が高まってきているということです。道北地域のこのような現状の中、女子選手が一人でもいれば、その子が継続していけるよう、また、そこから選手を増やしていけるよう、身近な生活圏でのサッカー環境を整備していくことが大事だと考えています。

### 毎週木曜日は『女子だけDay』&冬期間の『華リーグ』 ～旭川地区サッカー協会女子委員会の取り組み～

4月～10月の毎週木曜日は、女子だけでサッカーをする『女子だけDay』です。17:00～19:00までは小1～小6の「ガールズ広場」、18:30～21:00までは中学生と2つある高校女子サッカー部の「トレセン広場」が、東光スポーツ公園人工芝グラウンドで行われています。唯一女子だけでサッカーができる場とあって、平日の夜にもかかわらず、遠く美深、下川、名寄、羽幌からの参加選手も現れました。片道100kmちかくの移動距離を運転する保護者の皆様に感謝です。さて、この取り組みによって、下級生は上級生からサッカーだけでなくあいさつなど生活習慣の大切さ「off the pitch」の姿勢を学び、上級生は見本になる意識を持つことで積極性や責任感が身につきました。

11月～3月の冬期間は月2回程度、集まっ



た小学生をチーム分けしてゲーム潰けの「華リーグ」を行っています。

今後、女子サッカーの活動をさらに推し進めるために、幼稚園・小学低学年の層を増やしていくこと、高校卒業後の選手たちのサッカー環境を整備していくことにも目を向けて活動して行こうと考えています。

### 鈴木 康宏

普及コーディネーター  
道北ブロック担当

## 北海道U-13(中学生)女子8人制サッカーフェスティバル

### 中学生年代への競技継続のために

U-13女子8人制フェスティバルは、中学生になってもサッカーを続けていきっかけになるよう、中学1年生の女の子たちが同世代の選手たちと交流を図ることを目的として2019年からスタートしました。毎年、4月上旬、全道各地の中学1年生の女子選手が札幌に集い、地区毎のチーム同士で対戦します。

このフェスティバルに参加した選手たちが、今では、U-15リーグや道リーグ、そして、2022年度に創設された国体少年女子の部で活躍しています。

### 普及コーディネーターが アイデアを出し合う

フェスティバルの運営は、普及コーディネーターが中心に行っています。5ブロックの担当者がアイデアを出し合い、試合以外にも様々な企画を実施しています。2日間開催ではありますが、遠方からの参加者に考慮して1日だけの参加を可能としたり、



地区単位で参加できない選手のために、合同チームを用意するなど、できるだけ多くの選手が参加できるよう工夫しています。

また、審判委員会のご協力を得て女性ユース審判の実技研修会の場としても活用していただくなど、審判の育成にもつながっています。

コロナ禍で一時参加者は減少しましたが、2023年度は100名以上の参加者があり、競技継続の後押しにつながっているものと考えます。





## U-12 (小学生) 年代



小学生年代の活動を多くのスタッフが支えています。

小学生年代には、地域の少年団やクラブチームで、男の子と女の子が同じチームでトレーニングを行い、大会に参加します。男子と一緒に活動し、将来のレベルアップにつながる土台がつけられます。

一方で、各地域で女の子だけで参加できるサッカースクールや練習会、「なでこひろば」が開催されていますし、女の子だけで活動しているチームもあります。また、2011年のワールドカップドイツ大会で優

勝したなでこジャパン優勝に貢献した北海道出身の2選手の名前を冠した「JFA U-12ガールズゲーム北海道 熊谷・高瀬杯サッカー大会」など、女子選手だけの大会も開催されています。大会の運営には、4種委員会のスタッフの皆さまに多大なるご貢献をいただいています。個人参加を受け付けるなど、女の子がサッカーをはじめきっかけもつくってくださっています。

また、各地区主催の女子トレセン活動(選抜選手の練習会)では、優秀な指導者のもと、レベルアップがはかられています。



第4種ともいわれるこの年代は、北海道では男女一緒に活動する(MIXという区分)チームが多く、求めるスキルに大きな違いはありません。その中で、ガールズたちが身近な地域で集まれるよう、HKFAでは「ガールズサッカースクール」の開催を支援してきました。また、近年では各地区や女子チームが連携協力して、フェスティバル等の開催を通してガールズが光り輝くような場を創出しています。私自身、指導場面

では選手が自ら考え判断してプレーできるよう、視覚的手段を活用して分かりやすく情報を提示するなど、そのトレーニングやゲームでの目標やねらいを共有することに努めています。

関わる方々がベストサポーターとなり、ガールズが常に笑顔でプレーできる環境づくりを皆さんと共に進めていきたいと思えます。

### 横澤 基

(公財)北海道サッカー協会  
女子委員(U-12担当)・4種委員



## キッズ

### ボールに触れるはじめての一步

サッカーボールに触れる最初の機会をつくり、サッカーを楽しみ思ってくれる子どもたちを増やす取り組みが全道各地で行われています。キッズ年代は、女の子も男の子も一緒になってサッカーを楽しみます。

本誌でご紹介している苫小牧地区の黒澤さんのご活動のように、幼稚園への巡回指導はキッズ事業の大きな柱の一つです。また、子どもたちのことを理解する大人をより多く増やすために、キッズリーダー講習会を実施されています。

そして、子どもたちがボールを蹴ってゴールに入れることを楽しめるフェスティバルの開催が、各地区で工夫をこらしながら行われています。

キッズの活動の中では、サッカーをすることや体を動かすことが「楽しい」と感じられる経験につながるようなプログラムの提供やスタッフの関わりを心がけています。また、子どもたち自身が「考える」ことも大切にしています。自ら遊びや動きを創造し活動することも楽しさの一つです。こうした楽しかった経験は、確実に次へ、そして未来へつながっていきます。(一社)札幌地区サッカー協会で開催している「サッカー

全道規模では、毎年、「JFA ユニクロサッカーキッズ in 北海道」を開催しています。2023年度は、1,000人を超える子どもたちが札幌ドームに集まり、広い会場を走り回りました。キッズ委員会の皆さんが中心となって運営し、他の種別のスタッフも協力しながら大会を盛り立てています。保護者様に向けて、女子委員会では、リーフレット『女の子のためのサッカーガイド』を配布し、女の子がサッカーを続けるためのヒントをご提供しています。



キッズ大集合」には、その「楽しさ」を求めてリピーターさんや常連さんも多く参加しています。また、中にはたくさんの「サッカーガールズ」もいます。これからも、一人一人が自分の力に合わせて「楽しさ」を実感できる場を提供し続けていきたいと思っています。まずは、その「楽しさ」を経験させるところからスタートしてみませんか。

### 佐賀 主昌

(公財)北海道サッカー協会  
常務理事  
(一社)札幌地区サッカー協会  
常務理事・キッズ委員長



## JFA女子サッカーデー

### 女性が輝く社会に向けて北海道協会にできること

サッカーを通じて女性が輝く社会を目指し、JFAが掲げる「なでしこビジョン」。その実現に向けて、国連が定める「国際女性デー」と同じ3月8日が「JFA女子サッカーデー」と定められました。女性活躍に向けて、JFAとWEリーグが共同で女性のエンパワーメント原則に署名・参加し、女性リーダーシップ研修の実施や女性登用の推進と見える化などが進められる中、全国の地域協会でもその展開を期待され、2020年度から北海道でも取り組みを開始しました。女性活躍やジェンダー平等という社会課

題に、サッカー界が先んじて歩みを進めようとするJFA女子サッカーデー事業を推進するにあたり、北海道協会は、女子サッカーの価値を多くの方に知っていただくことを大きな方針としました。選手にサッカーを続けたいと思ってもらえるように、指導者や審判員、運営スタッフなど、サッカーに関わる様々な方法を知っていただけるように、そして、北海道の女性がサッカーを当たり前のように楽しめる社会になるための下地をつくることを目指して事業に取り組んでいます。

### 北海道のフットボールを支える女性たち

事業開始初年度はコロナ禍にあり、イベント実施が困難であったことから、『北海道のフットボールを支える女性たち』の第一弾を作成。JFA監修『サッカー × キャリア × 未来』に想を得たものです。選手の身近な存在である指導者や審判員、運営スタッフなど、サッカーに関わり続けるヒントを得られるように、あわせて、女性たちを通して、北海道の現状を分かりやすく伝えることを目指しました。

### イベント開催

2021年度は、WEリーグに焦点をあてたオンラインイベント『WEリーグ元年、女子サッカーの未来 私たちの将来を考える』を開催。JFAの今井氏とWEリーグの小林氏を迎え、WEリーグが目指す女性活躍の姿をご講演いただくとともに、北海道出身のWEリーグ選手からのメッセージ動画を

流したり、小樽出身で現アルビレックス新潟レディースの山谷選手とオンラインでつながりました。翌年はハイブリッド講演会として『リスペクトと歩む女子サッカー～女性活躍の未来、北海道女子サッカーの未来～』を開催。WEリーグ初代チェアの岡島氏とJFA今井氏から女性がスポーツをすることの意義を語っていただきました。いずれのイベントも選手たちの心に響き、日本や世界で活躍される方々の生の声に大きな刺激を受けた様子を理解することができました。今後も、北海道の女性の視野を広げる取り組みにも力を入れたいと考えます。



## JFA 女子サッカーデー

本冊子は、JFA 女子サッカー事業の一環として製作しております。



この度は「PASS TO THE FUTURE」の第2弾を手に取り、最後までお読みいただきまして、誠にありがとうございます。第1弾の作成においては、全国各地の多くの皆様にご好評をいただき、其のことが北海道の女子サッカー関係者においては大変励みとなりました。第1弾は、21名のロールモデルとなる方々に登場していただきましたが、第2弾はロールモデルとなる方々と、そこから、パスがしっかりとつながれてきた17名の方が登場しております。

この冊子は、身近で活躍する皆さんが、どのように女子サッカーに関わってきたか、そして、現在の取り組みについてお聞きしていますが、それぞれの活躍は、女性活躍のヒントになっています。サッカーを通して、出会いがあり、目指す目標ができ、やりがいを見つけ、成長する。その過程には、仲間や家族の支えがあり、それに対する感謝の気持ちが溢れていました。女子サッカーに関わるそれぞれの人のストーリーは、個人の「思い」が、「行動」となり、それが「拡大」し、現在の活躍につながっていると思います。「行動」へと一歩踏み出す時には、とても勇気がいることですが、そこには必ず「仲間」が存在し、その人を支えてくれている。そんな、構図がそれぞれの皆さんのストーリーから読み取ることができました。その、「思い」の中には、感謝の気持ちや、恩返しの気持ちがあること。よい経験を次の世代につないでいくことが女子サッカーの発展にもつながると感じました。また、身近な人の活躍が、次の人へ繋がっていく環境がスポーツにはあるのではないかと思います。スポーツの影響力は、いろいろな意味で大きいものと再認識しました。

今回は、普及大会、U-12年代、キッズ、シニア年代、フットサル、JFA なでしこ普及コーディネーター、北海道女子ユースダイレクターにもお話を聞いていますが、それぞれが、各年代や各地域の課題に合わせてしっかり場の提供をしていること。そして、女子サッカーをサポートする男性も多く存在しています。普及COや女子ユースダイレクターは、この広い北海道を5ブロックごとの地域を繋ぐ役割をしっかりと担うことができていることに感謝します。

女子サッカーの普及・発展の取り組みは、JFA と共にやってきたものであり、この北海道ではHKFA 女子委員会を中心として、15 地区サッカー協会の女子委員会をはじめ、特に普及に関わる、キッズ、4 種、3 種、フットサル、シニアの女子サッカーに関わる方たちがしっかりと場を作り、北海道に女子サッカーを根付かせるために努力してきたことがよくわかりました。

女性活躍という言葉を聞くと、まだまだ、一歩引いてしまう女性も多いと思いますが、私は、この冊子を読んでいただくことで、今ある「思い」を行動にすることが活躍の一步なのではないかと思っています。ただと、そのハードルが低くなり、一歩踏み出してもらえるものになることを期待しています。

北海道には女子サッカーに関わるサッカー協会役員、選手、監督、コーチ、審判員、技術委員、普及に関わる素晴らしい方々に支えられていることを、改めて心に刻みました。

最後に、この冊子の作成にあたり、原稿を提供していただいた皆様、及び（公財）北海道サッカー協会女子委員会の皆様に感謝を申し上げます。

（公財）北海道サッカー協会  
副会長

鷺津 裕美

まずは、『北海道のフットボールを支える女性たち』第2弾が完成したことに大きな喜びを感じています。ここに登場される方、冊子製作にご尽力いただいた皆さまに感謝を伝えたいと思います。北海道には、サッカーやフットサルの活動を支えてくださる素敵な女性がいること、そして、女性活躍社会に向けてそれぞれの組織の中で貢献されている女性がいることを誇らしく思いました。

読み進めるうちに、すべての女性たちに共通するキーワードは「人との出会い」ではないかと感じました。多くの女性たちが、仲間・家族・恩師という言葉をあげており、ご自身のターニングポイントで、誰かの後押しや影響を受けて、サッカーと出会い、続けることを選択し、さらには恩返しをしたいと思うようになったのではないのでしょうか。自分がサッカーを楽しむ気持ちはもちろん大切にされているとは思いますが、誰かのために何かをしたいという思いが「支える」ことにつながっていったのではないかと思います。温かい気持ちになりました。

また、三澤絢子さん、鈴木まなみさん、廣中千映さんとは、彼女たちが室蘭大谷高校女子サッカー一部の選手であった頃、私自身が監督という立場に関わることができた皆さんですが、この冊子で違う形で再会できたことには、感慨深いものがあります。別々の場所で活躍されていますが、学び共感できたことをそれぞれの形で自分に落とし込んでいって、成長を続けていることを頼もしく思いました。北海道の女子1級をつなげてくれた大村美詞さんが、国際審判員になりたいと、語ってくださっていることは、審判員の仲間としてとても嬉しいコメントでした。この冊子を通じて新しい一面を、新しい素敵な人たちを知ることができました。

女性たちの紹介だけでなく、第2弾からは事業紹介が加わりましたが、長くチームや地域に携わっていらっしゃる方の顔ぶれを拝見し、皆さんに感謝するとともに、この冊子に掲載されていない方にも、審判、指導者、運営スタッフとしてサッカーやフットサルを支えてくださっている方の存在を思いました。

この冊子を通じて、北海道でフットボールを支えてくれている女性の仲間たちがいることを多くの方に知ってもらいたいと思います。そして、第3弾、4弾と続いていくように、さらに素敵な仲間を増やして、北海道の歴史をつないでいきたいと思います。

（公財）北海道サッカー協会  
副会長

大岩 真由美

## PASS TO THE FUTURE

### 編集後記

北海道のサッカー・フットサルの道を切り拓き、支えてきた女性の経験を若い選手たちにつないでいければと思います、コロナ禍の2021年3月、本冊子の第一弾を発行しました。身近な女性指導者、審判員、運営スタッフをより深く知る機会となり、女子サッカーを取り巻く環境、地域や種別の状況などを理解する手立てとなったとの声を頂戴し、こんな女性もがんばっているよ、もっとこんなことを掲載したらよいのではとアイデアも寄せていただきました。手にとって読み込むことのできる冊子という形に「残していく」ことの意味と責任を認識しました。

第二弾となった本冊子では、頂いたアイデアを受けて、女性の皆さまを紹介するとともに、女子サッカーの事業や大会を紹介させていただきました。道内のサッカー・フットサル環境とあわせて、多くの人々の思いを感じていただければと思います。

本冊子の製作にあたり、メールや対面、Web会議システム等を通じてご取材をさせていただき原稿を作成しましたが、できあがった誌面を見て、よく書いてもらってしまった、自分はたいしたことはやっていないのに、との声をいただくこともありました。ご紹介させていただいた皆さまが積み重ねてきた一つひとつの選択や行動が、着実に道内のサッカー・フットサルの歩みを進めているものと思ひ、感謝を込めて編集したことをここに記します。

文章や画像を提供いただいた皆さま、ご取材に応じてくださった皆さま、お忙しい中ご協力をいただきありがとうございます。また、第一弾に続き製作にご尽力いただきました札幌大同印刷(株)の皆さま、事業全体の事務手続きを担ってくださった北海道協会事務局の皆さまにこの場をお借りして御礼申し上げます。

選手の成長を願う思いの強さと、フェアでしなやかなリーダーシップをお持ちの中川女子委員長に心からの信頼と感謝を込めて

(公財)北海道サッカー協会  
女子委員会 副委員長

橋本 美湖





皆さんの未来につながりますように







PASS TO THE FUTURE  
[北海道のフットボールを支える女性たち]



発行日:2024年3月8日

発行:公益財団法人 北海道サッカー協会

〒062-0912 札幌市豊平区水車町5丁目5-41 北海道フットボールセンター TEL 011-825-1100 FAX 011-825-1101

URL <https://www.hfa-dream.or.jp>

監修:公益財団法人 北海道サッカー協会 女子委員会

※本誌の記事・写真・図表・ロゴマークなどの無断転用を禁じます。 ※本誌に掲載されている所属・役職等は2024年3月時点のものです。